

2012年度 修士論文

メディアに見られる「応援」の対象としての日本代表

—1984年から2008年のオリンピック大会に注目して—

A study of the national team of Japan featured by the media as an object of "support"
-Focusing on the Olympic games between 1984 and 2008-

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科
スポーツ科学専攻 スポーツ文化研究領域

5011A022-0

落合 佐和子

研究指導教授： 石井 昌幸 准教授

はじめに	・・・1 頁
------	--------

第Ⅰ章 メディアを通して見られるスポーツ

1. スポーツとメディアの歴史	・・・4 頁
1) スポーツとラジオ、テレビ	・・・4 頁
(1) ラジオ	・・・4 頁
(2) テレビ	・・・5 頁
2) オリンピックとメディア	・・・6 頁
(1) 新聞	・・・6 頁
(2) ラジオ	・・・6 頁
(3) テレビ	・・・8 頁
3) オリンピックと第二次世界大戦	・・・9 頁
4) オリンピックと東西冷戦	・・・10 頁
5) オリンピックとナショナリズム	・・・11 頁
2. 日本代表を応援するという態度	・・・12 頁

第Ⅱ章 7つの大会とメディア

1. 新聞	・・・18 頁
1) 内容的変化	・・・19 頁
(1) 84 年ロサンゼルス大会・88 ソウル大会	・・・19 頁
(2) 92 年バルセロナ大会・96 年アトランタ大会	・・・23 頁
(3) 00 年シドニー大会・04 年アテネ大会・08 年北京大会	・・・31 頁
2) 数量的変化	・・・44 頁
2. テレビ	・・・47 頁
1) オリンピックタレント	・・・47 頁
2) 現在のテレビの仕組み	・・・53 頁
(1) 放映権料と放映権獲得機関、視聴率	・・・53 頁
(2) 放送時間	・・・55 頁
①総放送時間	・・・55 頁
②1 番組あたりの長時間化	・・・56 頁
3. その他（雑誌・アサヒグラフ）	・・・58 頁

第Ⅲ章 「応援」の対象としての日本代表

1. 日本代表を応援するという態度	・・・63 頁
2. 新しいナショナリズム	・・・64 頁
3. 現在における日本代表を応援するということに関する考察	・・・66 頁

終わりに	・・・68 頁
------	---------

はじめに

2011年7月17日、FIFA女子サッカーワールドカップにおいて、なでしこジャパン（サッカー女子日本代表の愛称。「なでしこ」とも略される）が世界一となった。当初ほとんど注目されず、NHK-BSでのみだった試合の中継は、決勝トーナメント（準々決勝）から地上波（フジテレビ系列）でも生中継され、決勝戦は早朝3:45という試合開始時間にもかかわらず、異例の高視聴率をたたき出した¹。なでしこジャパンは、同年3月11日に起こった震災から立ち上がる日本の象徴として、被災地に希望を与える存在として、一躍国民的人気を得た²。翌年行われたオリンピック・ロンドン大会において、なでしこジャパンは惜しくも銀メダルという結果に終わるが、その人気は衰えることを知らない。また、オリンピック・ロンドン大会では、サッカー女子だけでなく、さまざまな競技がテレビを通して、生で観戦され、日本列島は眠れない日々が続いた。

では、日本人はなぜ日本代表を応援し、その結果に一喜一憂したのだろうか。そこにメディア³の存在は欠くことが出来ない。先にあげた、サッカー女子のワールドカップにおいても、大きな注目を集めるためには、なでしこジャパンが決勝トーナメントに残り、競技の成績を残したという点だけでは不十分で、なでしこの活躍はだれもが見ることの出来る地上波でテレビ放送されたからこそ、現在に至る人気が起こったと考えられる。

2012年7月22日、ロンドンオリンピックを目前に、オリンピックの正式種目から外れたソフトボールの世界選手権がカナダの地で行われた。この大会において、日本は宿敵アメリカを破って優勝を収めた。決勝戦で先発した投手は、2008年北京大会での力投が記憶に新しい上野由岐子であった。⁴しかし、このことを知る人は日本人でもそう多くはないだろう⁵。

新聞、テレビ、インターネットとメディアは様々に変化し、数多くの進歩をとげている。ここ数年を見ても、ワンセグ放送の開始や地上アナログ放送からデジタル放送への移行、そして、インターネットによる動画配信の普及など、その変化はめまぐるしい。そうしたメディアの技術的な変化が、スポーツの描き方に与えた変化は無視できない。半世紀前の1960年ローマ大会では、競技を収めたテープが空輸され、競技の様子は2、3日遅れでテレビ放送された⁶。それが、2012年ロンドン大会では、ほぼ全ての競技がテレビまたはインターネットを通してライブで観戦することが可能になった⁷。

そうした変化の中においても、スポーツは常に人びとを引き付けるコンテンツであり続けている。このことは高騰を続けるオリンピックの放映権料を見れば明らかだろう。メディアを介して伝えられるスポーツの国際大会において、日本人が日本代表を応援するということに違和感を覚える人は少ないだろう⁸。むしろ、スポーツの国際大会ほど、日本を意識する場面に私たちは日常で出くわすことはない、とすら言えるかもしれない。そうした日本代表を応援するという態度については、すでに多くの研究において、指摘がされている。主なものとしては、阿部の『スポーツの魅惑とメディアの誘惑』⁹や香山の『ぶちナシヨナリズム症候群』¹⁰が上げられる。

今福は、メディアは視聴者の期待に応えるというのを正当化の根拠にしており、そうした視聴者の期待に応える一番確実な方法として、「人々の期待そのものを作り出す」ことをあげている。今福によれば、メディアにおいてヒーローやヒロインが作られるのは、それらに「集客力」があるからである。¹¹これは、メディアと受け手である私たちの共同作業によって、伝えられる内容は作られているということを意味しているのではないだろうか。また、高井はラジオを例に、「スポーツ中継の『声』は常に、ある文化・社会背景のなかに存在する生き物であり、その『受け入れ』あるいは『拒絶』も同時代を生きるオーディエンスによって決定される」と述べている¹²。高井の指摘はラジオのスポーツ中継にとどまっ

たものだが、これらは新聞、そしてテレビといったメディアにも共通するものであると言えるだろう。

本研究では、オリンピックを対象としてメディアにおける日本人の描かれ方及びそこに存在する演出を見ることで、阿部や香山の指摘するスポーツの国際大会において、日本代表を応援するという態度がいつ頃から見られ、それらはどのように変化したのかということとを明らかにする。その上で、日本代表を応援するという態度が形作られる背景について、筆者なりの考察を加えることを最終的な目的とする。

オリンピックとメディアを対象とした研究は、先にあげた阿部だけでなく、数多く存在する。清水らは、オリンピックにおける政治性を再考することを目的として、複数の大会に対して、様々な角度から指摘を行っている¹³。舛本は、オリンピックの記録映画を文化解釈学の視点等から分析しているし¹⁴、高木・坂元らは、88年ソウル大会、92年バルセロナ大会、96年アトランタ大会を対象に、大会前後での外国イメージの変化をみている¹⁵。また、スポーツとメディアを対象を広げると、神原は数学的にスポーツに関するテレビ番組の変化を調査、分析している¹⁶。他にも2002年の日韓ワールドカップから日本と共同開催を行った韓国のイメージの変化見ようとしたもの¹⁷なども存在する。しかし、それらは個々の大会を対象としたものがほとんどであり、メディアとスポーツのかかわりを歴史的に研究したものは、少ない。（ただし、事典的に複数のオリンピック大会について、網羅的に書かれた本は存在する¹⁸。）先にあげた清水らの研究は、様々なオリンピックに関する論文等をひとつに集めることで、多面的にオリンピックを捉えようとしたものであり、時系列にそって、一つの切り口から論証がされたものではない。そのため、本研究ではオリンピック大会を時系列で並べ、その中で日本人の描かれ方の変化を追っていきたい。

本研究で対象とするのは、84年ロサンゼルス大会、88年ソウル大会、92年バルセロナ大会、96年アトランタ大会、00年シドニー大会、04年アテネ大会、08年北京大会の7つオリンピック大会¹⁹である。先に述べたように、本研究では時系列でオリンピックにおける日本人の描かれ方の変化を見ることを目的としているので、連続した7つの大会を対象とした。84年ロサンゼルス大会から08年北京大会までを見ることで、20年間の変化を見ることが出来る。

「第Ⅰ章 メディアを通して見られるスポーツ」では、まず、メディアとスポーツ、オリンピックのかかわりの歴史を確認する。その上で、メディアを通して見られるスポーツが持つ問題点として長く言われているナショナリズムと、現在指摘されるナショナリズム、それぞれについて明らかにし、先行研究の検討とする。

「第Ⅱ章 7つのオリンピック大会とメディア」では、先にあげた7つのオリンピック大会を対象として、新聞、テレビ、雑誌における日本人選手の伝えられ方の変化を見る。

「第Ⅲ章 オリンピックにおける日本人の描かれ方の変化」では、まず、第Ⅱ章で見ることのできた変化をもとに、阿部や香山の指摘について改めて検討する。その上で、それらを区分する。

-
- ¹ 平均視聴率 32.5% (フジテレビ系 : 27.7%、NHK・BS1 : 10.7%)
瞬間最高視聴率 (フジテレビ系・6:24 : 27.7%)
スポーツ報知ホームページ <http://hochi.yomiuri.co.jp/soccer/japan/news/20110719-OHT1T00294.htm>
2013年1月9日閲覧。
- ² 『産経新聞』、2011年7月19日、22面、『読売新聞』、同日、34面、『日刊スポーツ』、同日、19面。
- ³ メディアとは広範な意味を持つ言葉だが、ここではいわゆる「マス・メディア」のことをさす。
- ⁴ 日本ソフトボール協会ホームページ
http://www.softball.or.jp/info_national/nw/2012/nw_12_worldcup_result.html (2013年1月7日閲覧。)
- ⁵ 筆者は、大学時代にソフトボール部に所属しており、周囲にはソフトボールを愛好する者も多いが、この大会について知っている者はほとんどいなかった。
- ⁶ 武田薫、『オリンピック全大会 人と時代と夢の物語』、朝日新聞社、2008年、75-76頁。
- ⁷ 総務省ホームページ 日本放送協会の「オリンピックロンドン大会に係る一部の競技の生中継映像をインターネットを通じて一般に提供する業務」の認可。
http://www.soumu.go.jp/menu_news/s-news/01ryutsu07_02000039.html 2012年12月26日閲覧。
- ⁸ 多木浩二、『スポーツを考える』、ちくま新書、1995年(2009年)、69頁。
- ⁹ 阿部潔、『スポーツの魅惑とメディアの誘惑 身体／国家のカルチュラル・スタディーズ』、世界思想社、2008年。
- ¹⁰ 香山リカ、『ぶちナショナリズム症候群 若者たちのニッポン主義』、中論公論新社、2003年。
- ¹¹ 今福龍太、西谷修、稲垣正浩、『近代スポーツのミッションは終わったのか 身体・メディア・世界』、平凡社、2009年、37頁。
- ¹² 高井昌吏「スポーツ中継とメディアの媒介性 実況放送の社会学」、高井昌吏・谷本奈穂編『メディア文化を社会学する 歴史・ジェンダー・ナショナリティ』、世界思想社、2009年、25頁。
- ¹³ 清水論編『オリンピック・スタディーズ 複数の経験・複数の政治』、せりか書房、2004年。
- ¹⁴ 舩本直文「第五章 記録化されるスポーツーオリンピック大会のドキュメンタリー映像」『スポーツ映像のエピステーメー 文化解釈学の視点から』、新評論、2000年。
- ¹⁵ 高木栄作・坂元章、「ソウル・オリンピックによる外国人イメージの変化ー大学生のパネル調査ー」、日本社会心理学会編、『社会心理学研究 第6巻』、98-111頁。
村上光二・高木栄作・坂元章、『バルセロナ・オリンピックによる外国イメージの変化(1)』、日本社会心理学会編、『日本社会心理学会第34回大会論文集』、142-145頁。
向田久美子・坂元章・村上光二、高木栄作、「アトランタ・オリンピックと外国イメージの変化」、日本社会心理学会編、『社会心理学研究 第16巻第3号』、2001年、159-169頁。
- ¹⁶ 神原直幸、『メディアスポーツの視点 疑似環境の中のスポーツと人』、学文社、2001年。
- ¹⁷ 荻原滋「第12章 メディアイベントとしてのFIFAワールドカップーテレビ報道の内容と評価ー」、上瀬由美子「第13章 ワールドカップによる外国イメージの変容ー日韓共催によって韓国イメージはどう変わったかー」、荻原滋・国広陽子編『テレビと外国イメージ メディア・ステレオタイプ研究』、勁草書房、2004年。
松本悦子「マス・メディアとスポーツ報道をめぐる問題ー朝日新聞における2002年W杯報道を事例にー」、『応用社会学研究 2003 No.45』。
- ¹⁸ たとえば、武田『前掲書』、ジム・パリー、ヴァシル・ギルギノフ、舩本直文(訳・著)、『オリンピックのすべて』、大修館書店、2008年などがあげられる。
- ¹⁹ 一般的な「夏のオリンピック」の正式名称は「オリンピック競技大会」であり、「(回数)オリンピック競技大会 ((年)/(都市名))」と記述するのが正式である。本研究では、便宜上、以下、「(年)(都市名)大会」と記述することを基本とする。
(例 正式 : 第30回オリンピック競技大会 (2012年/ロンドン) 本研究 : 2012年ロンドン大会)

第Ⅰ章 メディアを通して伝えられるスポーツ

1. スポーツとメディアの歴史

ここでは、スポーツがメディアによって、どのように伝えられてきたのかを見ていく。このことは、スポーツとメディアの歴史の大まかな流れを確認するとともに、第Ⅱ章以降で本研究が対象とする1984年以降の大会を見て行く際の比較の対象としての初期のスポーツ及びオリンピックを知るという点で、大きな意味を持つ。

「1) スポーツとラジオ、テレビ」では、日本におけるそれぞれのメディアの歴史を俯瞰すると同時に、それらがスポーツといかに関わったのかを確認する。その上で、「2) オリンピックとメディア」では、それぞれのメディアがオリンピックをいかに伝えたのかということに焦点をあて、その歴史を見ていく。「3) オリンピックと第二次世界大戦」「4) オリンピックと東西冷戦」では、本研究で問題としているナショナリズムを語る際、必ず出てくる第2次世界大戦と東西冷戦とオリンピックの関係を整理する。その上で、「5) オリンピックとナショナリズム」についての先行研究をあげる。

1) スポーツとラジオ、テレビ

(1) ラジオ

日本のラジオ放送は1925年に始まった。1923年に起きた関東大震災の2年後のことである。「ラジオという新しい文化の誕生は、復興にはげむ市民に大きな話題を提供」した、と言われている¹⁾。その後、1927年には、大阪放送局によって甲子園球場で行われた「全国中等学校優勝野球大会（現全国高校野球選手権大会）」の中継放送が行われた。これは、「他局とくに東京に先駆けて、中継放送をスポーツの分野で実施」したいと考えた大阪放送局の熱意によって実現されたが、当初は甲子園球場の所有者である阪神電鉄が「『放送されると、炎天下にわざわざ球状にまで野球を見にくる人が減少する』と、難色を示した」とされる²⁾。この阪神電鉄の当初の心配は、満杯のスタジアムをテレビで眺める私たちにとって、杞憂であることは明らかである。しかし、当時の人にとって、ラジオとはそれほど未知のものであり、実況中継の効果は、十分に理解されていなかったことがうかがえる。また、この時、中継担当に指名されたアナウンサー魚谷忠は「試合内容をできるだけ忠実に描写すること、野球を熟知していない人でも放送に興味を持てるように、平易な言葉で放送すること」を心がけた、と言う³⁾。この魚谷の言葉から、ラジオにおける野球の中継放送は、野球観戦の玄人ではなく、多くの一般の人を対象としていたことがわかる。

1928年11月5日には、東京、大阪、名古屋、札幌、仙台、広島、熊本それぞれの放送局を結ぶラジオの全国放送網が完成した。これにより、六大学野球リーグ戦が全国放送されるようになった。こうしたラジオ中継の影響もあり、「野球熱は全国に広まった」。なかでも早慶戦は、「人びとの血を沸かせ」、「現在のプロ野球日本シリーズやオールスター戦を上回るほどの人気があった」と言われている。この早慶戦ブームは、「ラジオから流れる松

内則三の名調子」によって後押しされた。⁴松内のアナウンスは、「放送の随所に名文句を挿入して試合の雰囲気盛り上げ、聴取者に放送を聴く心地よさと臨場感を与え」るものであったとされ⁵、『面白さは当代随一』と評判をとった⁶。しかし、こうした松内のアナウンスには、批判もあった。

「放送のなかに独自の表現や川柳を取り入れたりして、内容に変化をもたせているが、しゃべりがうるさすぎる。大衆受けをねらうのもいいが、あれでは野球の細かいプレーなどは分からない。」⁷

第二次世界大戦での敗戦は、日本の放送界をふたつの点で、大きな転機となる。1つは、NHKの根本的な改変であり、もう1つは、民間放送局（以下「民放」と略す）の設立である。日本発の民間放送局は、名古屋の中部日本放送と大阪の新日本放送（以下「NJB」⁸と略す）であり、両局は1950年9月1日に開局した。NJBは、開局の翌日、甲子園球場で行われた日米親善野球の試合を、解説付きで中継した。これは民放初の野球中継であると同時に、アナウンサーと解説者のコンビによる実況放送という新しい手法の登場でもあった。⁹

（2）テレビ

1936年、ベルリン大会でのテレビの実況中継を目の当たりにし、次回（1940年）大会の開催が決まっていた日本では、NHKによって急ピッチでテレビ技術の研究が進められた。この時、放送の計画もすでに立てられていたが、東京大会は多くの人が知るとおり、戦火が激しくなる中で、返上されてしまい、テレビの研究もストップしてしまった。¹⁰戦後、GHQは「テレビの研究は、電波兵器のような軍事用の研究と関係が深い」として一度は禁止するが、技術者の必死の説得から、実験は再開された。¹¹

1953年2月1日にはNHK東京テレビジョン局、8月28日には日本テレビ放送網（以下「NTV」と略す）が、相次いで開局する¹²。NTVはスポーツ中継に「とくに力を入れ」、「後樂園スタジアムと独占契約を結」んだプロ野球中継や「米大リーグのニューヨーク・ジャイアンツとの親善試合や白井義男対テリー・アレン（英国）のプロボクシング世界フライ級タイトルマッチなどを放送」した。開局2日目に、プロ野球巨人－阪神戦を中継したことからも、NTVの力の入れようを見て取ることができる。

テレビの登場は、アナウンサーと解説者の関係にも大きな変化をもたらした。先のラジオの項でも見たように、ラジオ中継に初めて解説者が現れるのは、1950年の日米親善野球のことだったが、「ラジオ中継の場合は、解説者はアナウンサーの実況描写の合間に言葉をはさむくらいのものだ」った。しかし、「テレビでは、描写よりも解説が中心になるため、専門解説者の活躍の場がぐんと広くな」った、と橋本が説明するように、ここでアナウンサーと解説者の立場に大きな転換が起こったのだ。¹³下記のテレビ欄に関する記述からも、そのことを読み取ることができる。

解説者が脚光を浴びるにつれ、新聞の放送欄は、しだいに記載事項に変化が生じる。以前は、たとえ

ばプロ野球や大相撲放送の予告の場合、「実況〇〇アナウンサー」と派手に紹介されていたものが、解説者の登場後は、「実況〇〇アナウンサー、解説〇〇」となり、やがて「解説〇〇、実況〇〇」と順序が逆転、さらに歳月が経過すると、(現在はこの形が大部分だが)「解説〇〇」と解説者だけが掲載され、アナウンサーは活字から脱落することが多くなった。¹⁴

現在では、スポーツ中継において当たり前となっている VTR が導入されたのは、1958 年、大相撲名古屋場所のことである。KRT (現 TBS) によって、導入されたこの技術は当時としては、とても画期的なものであった。また、NTV が 1000 ミリ望遠レンズで土俵上の力士の表情を大写しにするなど、「NHK だけでなく NTV、KRT などの民放テレビ局が…演出や技術面に工夫をこらしながら、しのぎを削っ」た。¹⁵

昭和 34 年の皇太子結婚という世紀の祝典によって、テレビの受信契約数は急激に増加し、この年から、日本の放送は「ラジオではなく、テレビへ移行した」のであった¹⁶。

2) オリンピックとメディア

(1) 新聞

初期の新聞はオリンピック大会の競技を伝える際、「報道写真をいかに速く紙面に掲載するかを心を砕いた」。現在では、競技が行われた日の翌日もしくはその日の新聞紙面(朝夕刊)に選手の写真が載るのは当然のことであるが、技術の発達していなかった 1936 年ロサンゼルス大会においては、開会式の様子を写した写真が紙面(号外)に掲載されるまでに 2 週間という時間がかかっている。しかも、これは当時の有力新聞である『東京朝日』や『東京日日』が「精一杯のスピード輸送を実施し」た結果である。¹⁷

(略) 開会式当日の夕方ロスを出航するハワイ行きの米国船にフィルムを託し、ホノルルで追いついた日本行きの別の米国船に積みかえたあと、房総半島野島崎沖でこのフィルム入りの容器を洋上に投下。待ち受けていた発動機船がこれを拾い上げて日本の竹ザオの間に吊るし、新聞社の航空機が軽業のように釣りあげて空輸した。¹⁸

このように、携帯電話で撮った写真を誰でも気軽に送ったり、受け取ったりすることが当たり前になった現在では考えられないことだが、こんなにも大変な手間と労力をかけて、当時の人はオリンピックの写真を紙面に載せたのだった。

(2) ラジオ

日本における最初のオリンピックのラジオ放送は、1936 ロサンゼルス大会において行われた。日本放送協会(以下「NHK」と略す)は、中継放送の計画を立てたが、「米国内の放送問題のとばっちりを受けて、結局実現しなかった」。そのため、“実感放送”によって、競技の様子は伝えられた。これは、「スタジアムで競技を観戦したアナウンサーが、競技終了後、自動車で十五分ほどの距離にある NBC ロサンゼルス KFI 放送局に駆けつけ、見た

ままの実況さながらに再現してアナウンスするというものであ」る。これは、競技をあとから再現するという方法であるので、ときに「アナウンスが実際の競技時間よりも長くかかることがあった」と言われている。この大会において、南部忠平が陸上男子三段跳びで優勝という結果を残し、その様子は実感放送によって伝えられ、「日本中を熱狂させ」た。

しかし、このラジオによる実感放送は、以下の南部のインタビューの様子にも見られるように、選手にまで浸透したものではなかった。このインタビューから、選手がこの放送を強く意識してはいなかったことがうかがえる。¹⁹

KFI スタジオからの“実感放送”終了後、松内は、競技場からやってきた南部に日本の聴視者へ向けて優勝の喜びを語ってくれるように依頼し、マイクを渡す。

だが、金メダリストの南部は、「感慨無量でもう話せません。それに米国からの放送が果たしてみなさんに聞こえているかどうか分からないので、いずれ帰りましてから……」²⁰

1936年ベルリン大会において、ナチス・ドイツは「五輪を世界に“宣伝”するため」、国内の中継回線の設置や短波放送機の増設、録音機や録音自動車の用意など、「あらゆる放送機能を動員した」²¹。日本では、前回大会で実現がかなわなかったラジオの中継放送が、実現したのだ。²²

開会式担当の河西三省の実況アナウンスは、ドイツで録音され、日本時間八月二日朝六時三十分から七時まで全国に中継された。

ベルリンからの実況中継は、日本ではこの日から十六日まで、午前六時半から三十分間と午後十一時から一時間、毎日行われる。

早朝、深夜のオリンピック放送が連日続いたので、日本中が睡眠不足に追い込まれた、という。²³

時差の大きな国で行われているオリンピック大会で行われる競技の放送を聴くために、「日本中が睡眠不足に追い込まれる」というのは、この最初のラジオ中継からすでに始まっていたのである。

しかし、実況された内容に目を向けると、現在の日本の放送とは様子を異にする点を見て取ることが出来る。

(実況)

あと四〇メートル、三〇メートル、二〇メートル、一〇メートル、孫君ついにテープを切りました！堂々、わがマラソン日本はマラソンに優勝いたしました！

わが報道陣、また我知らずに叫ぶ万歳であります。わが日本は、ついに苦節二十数年にいたしまして、堂々いま、孫君によりまして、マラソンのテープは切って落とされたのであります。この十数万人の観衆の拍手をお聞きます。日章旗よ、メインマストに高々と揚げられ！ ついにわがマラソン、孫君によりまして堂々優勝いたしました。

(表彰式)

いま、メインマストに高々と日章旗が翻りました。その右側には南君が掲げました日章旗、左側に

はイギリスのハーパーの掲げましたユニオンジャックが翻っております。²⁴

また、現在でも広く知られる「前畑がんばれ！」の放送²⁵がされたのも、このベルリン大会であった。この河西による実況は、「一世を風靡した形だったが、批判も多かった」と言われている。

（略）あれでは“応援放送”で、客観的な実況放送とは言えない。出場選手の記録や前畑、ゲネンゲルに続く第三位以下の選手の順位が不明で、スポーツ中継としては“欠陥商品”だ。アナウンサーは、どんな場面で冷静であるべきで、頭に血がのぼった状態ではよい放送はできない、などがその主なものである。

また、競泳関係者からは、「前畑があぶない、あぶないとの放送だったが、あぶないだけではレースがどうなっているか分からない。また、前畑は自分の泳ぎができなくなって差をつめられたのか、それとも前畑は好調な泳ぎだったのにゲネンゲルがスパートして追い込んできたのかも判然としない。ニュース映画を見ると、前畑が確実にゲネンゲルを抑えて勝っているようで、放送の感じとかなりちがう」との意見も出ていた。²⁶

橋本は、後にこの放送を聴き、「河西の怒濤のような実況アナウンスから生まれた圧倒的な迫力」を感じ取っている²⁷。また、橋本はこうした熱狂を「二・二六事件後の暗い世相をつかの間でも忘れたい、という庶民の気持ちの表れだったのかもしれない」と指摘し、同時に、この大会の中継を「戦前のスポーツ放送の頂点を形成したと言ってもいい」と評している²⁸。こうして頂点を極めたスポーツだが、戦火により、40年大会と44年大会は中止となってしまう。

1948年ロンドン大会は、「戦争の張本人と目される日本とドイツは招待されなかった」²⁹。日本は、その次の大会である1952年ヘルシンキ大会から、オリンピックに復帰する。戦後、禁止されていた国際放送も再開され、1952年ヘルシンキ大会は、NHKによって中継放送がなされた³⁰。また、同年のコルチナ大会から、冬季大会も実況中継されるようになった。

（3）テレビ

1936年ベルリン大会における映像メディアと言うと、レニ・リーフェンシュタールによって作られた映画『民族の祭典』が有名だが、この大会において、「ドイツはテレビジョンの実況中継を行っ」た。これは、ベルリン市内にスクリーンを設置し、大会期間中1日に3回の放送を行うというものであった³¹。

56年コルチナ冬季大会は、日本で初めてラジオの実況中継がされた冬季大会であったが、同時に、日本のテレビでオリンピックが初めて放送されたのも、この大会であった。NHKは、フィルム・サマリーを購入し、日本選手の出場するシーンを中心に編集し、テレビ放送した。³²この大会では、猪谷千春が、日本人として初めて冬季オリンピックで、金メダルを獲得した³³。同年のメルボルン大会において、NHKは「現地購入分と特派員取材のフィルムを中心に」1日3回『『オリンピック特報』を放送し」た³⁴。

60年ローマ大会において、現地で撮影された映像が、空輸、編集され、テレビ放送された。これらは、大変な時間がかかるものであったと同時に、途中の事故で放送時間に間に合わないこともあった³⁵。なお、NHKの派遣団の団長を務めた佐野弘吉（報道局長）は、放送局の部内誌において「スポーツ放送も“報道放送”の一環であるとの観点から、…放送内容に幅と厚みを持たせることを要望した」³⁶。

1959年、ミュンヘンで開かれたIOC総会において、1964年の開催地が東京に決まると、NHKでは「大掛かりな中継・報道体制」が組まれた³⁷。前回のローマ大会では、空輸によって運ばれたフィルムを日本で放送していたが、64年東京大会では、衛星中継が行われた³⁸。

開会式中継の演出面を担当したNHKプロデューサーは、「“芸術的”なショットは避け、選手団の行進はどのようにおこなわれるのか、聖火はどこから入場するのか、といった、説明的な描写に重点を置いた。そのほうが、視聴者には、開会式の全体像が把握できると考えたからだ」と述べている³⁹。この映像が、民放でも使われ。民放各局はこの映像に独自色を出そうとした。そのことが、以下の記述からよくわかる。

NTVは、開会式前に四十五分、式後に四十分の番組を組み、第一部で第一回アテネ大会から第十七回ローマ大会までのハイライトと、選手村をはじめ競技場周辺のあわただしい光景を放送、第二部は川本信正の解説による実況中継、第三部は読売ランドのスタジオに会場を移し、坂本九の司会で、アイドホールで開会式中継を見た人びとに感想を聞いている。

TBSテレビは、開会式に先立ち、オリンピックにわく東京の表情を中継車とヘリコプターで伝え、また、皇居前広場と赤坂見附付近にもカメラを置いて、国立競技場までの最終コースを走る聖火を追った。

フジテレビは、ゲストの木下恵介が映画監督の立場から開会式の演出にポイントを置いた解説をしたほか、選手団の入場行進途中、競技場へむかう聖火ランナーをインサートするなど、サイド中継を織り込んでいる。

NET（現テレビ朝日）は、過去のオリンピックの開会式をフィルムで放映し、金栗四三、織田幹夫、兵頭（前畑）秀子らの回顧談のあと、森繁久弥をゲストに、開会式の実況中継をおこなった。

東京12チャンネル（現テレビ東京）は、一時間の特別番組「いま開く東京オリンピック」を放映後、東京の変遷ぶりをカメラで紹介し、作家有吉佐和子らをゲストに、開会式を中継している。⁴⁰

このように64年東京大会において、民放各局はさまざまな演出をおこなっている。東京大会は「はじめて世界的ネットワークを完成させ、国内放送でも、ラジオと共に、大々的なオリンピック中継をくりひろげ、日本中のほとんどの人⁴¹が“テレビ漬け”になった」⁴²とされ、スポーツ実況中継の「ひとつのピーク」⁴³と言われている。

3) オリンピックと第二次世界大戦

1936年「ベルリン大会はヒットラーの大会といわれる」⁴⁴。それは、ヒトラー⁴⁵率いるナチス・ドイツのプロパガンダとして、利用された大会として広く知られているからだが、

オリンピックよりも先にファシズムのプロパガンダとして利用されたのはサッカーのワールドカップであった。第2回大会は、もともとスウェーデンでの開催が有力だったが、「ムッソリーニが強引に持ち帰り、イタリアでの開催となったと言われている⁴⁶。」「第1回ワールドカップの会場はモンテビデオ1ヵ所だったが、イタリア大会からは地域予選も行い」、「地元イタリアは、南米から強力な助っ人を〈輸入〉するというのがむしろな戦術まで使って、ローマ→フィレンツェ→ミラノで勝ちあがっていき、各地でナショナリズムに火をつけ」た。決勝は、ローマでチェコスロバキアとの対戦が行われ、「ムッソリーニを貴賓席に戴いた5万人の大観衆の前」で、イタリア代表は「終了5分前に同点に追いつき、延長戦で試合を決めた。」「ムッソリーニが右手を135度にかざしてイレブンを讃えると、選手たちも同じ敬礼を歓喜の空に突き刺し、スタジアムは一つになった」と言う。⁴⁷この決勝戦はヒットラーとムッソリーニの会談の2日前に行われている。武田は著書の中で、この成功体験の「話が出なかったはずがない」と指摘している⁴⁸。

この武田の指摘の真偽は明らかでないが、1936年ベルリン大会は、結果として、ドイツのプロパガンダとなった、とすることができるだろう。

つづく1940年、開催都市は東京に決まっていた⁴⁹が、1937年盧溝橋事件に端を発する日中戦争の勃発、翌年の国家総動員法が制定⁵⁰と、日本の「国内情勢はもはやオリンピックを迎えるどころではな」⁵¹くなった。1938年には、初参加から日本のオリンピックの指揮をとってきた嘉納治五郎が亡くなり、このことも大きな「痛手」となった⁵²。結局、1938年の閣議において、東京大会はその中止が決定されてしまう⁵³。

代替地となったフィンランドの首都ヘルシンキは、1940年大会の候補地として、最後まで東京と争った都市であり⁵⁴、「代替開催に自信を持っていた」⁵⁵。しかし、戦火は、激しさを増し、「文字通りの世界大戦に平和の祭典は吹き飛んだ」⁵⁶という武田の言葉にもあるように、第12回、第13回大会は中止となった。

4) オリンピックと東西冷戦

オリンピックの孕む政治性については、次項で見るように、様々な分野で指摘されてきた。それらが言われる背景にあるのは、戦前のオリンピック大会もさることながら、冷戦下のオリンピック大会の強い印象があるからだろう。

日本とドイツが戦後のオリンピック大会復帰を果たした1952年ヘルシンキ大会において、ソビエト社会主義共和国連邦（以下「ソ連」と略す）は、大会に初めて参加をする。1917年のロシア革命以来、「オリンピックはブルジョワジーの大会」と拒んできたソ連だった⁵⁷が、1950年のヨーロッパ陸上選手権での自国選手の活躍を機に路線を変更し、オリンピック大会に参加するようになった⁵⁸。1951年のIOC総会において、選出されたアベリー・ブランデー第5代会長が「政治不介入」を旗印としていたのをあざ笑うかのように、その後のオリンピック大会は東西冷戦の「代理戦争」とも呼ばれる事態が続いた。ソ連や東ドイツによるステートアマ選手による国家政策としてメダルを獲得しようという試みは「赤いメダ

ル狩り」とすら呼ばれた⁵⁹。

国から支援を受けて、スポーツを行うステートアマ選手の存在は、1946年のヨーロッパ陸上選手権ですでに確認されていたが、IOCは彼らをアマチュアと認めた。これは、当時、IOCの副会長だったブランデーが「スポーツの独立」を主張し、ナチス・ドイツすらも拒否しなかった過去の歴史を鑑みれば、当然のこととも言える⁶⁰。

1956年メルボルン大会から、ソ連の国家としてのメダル獲得政策が本格的に成果を残し始める。ソ連はアメリカをメダル獲得数でアメリカを抜き、トップとなった。1968年メキシコ大会から、東ドイツが大会に参加するようになり、オリンピック大会における東西冷戦の色はますます濃くなる。

1980年モスクワ大会は、ソ連のアフガニスタン侵攻に抗議して、西側諸国がボイコットした大会として知られている。1979年12月28日、ソ連がアフガニスタンの首都カブールに侵攻、翌年1月8日には当時のアメリカ大統領ジミー・カーターはボイコットを示唆した。しかし、そもそも、「オリンピック大会への参加は、国家の介入を避けるため、国際オリンピック委員会（IOC）が各国のオリンピック委員会（NOC）に招待状を出し、NOCがそれに応えるという形をとっている。国旗を掲げはするものの概念としては国家の括りを超えたオリンピック・ファミリーの大会であり、国家の元首にはなんの権限も与えられていない。」そのため、カーターはIOC会長のキラニンへのメッセージや西側諸国への連帯を呼びかけたのだった。⁶¹アメリカのオリンピック委員会は1980年4月12日にボイコットを表明し、日本はエントリー締切日の5月24日に決定を下した⁶²。結果として、モスクワ大会には、80カ国5179人が参加をした。フランス、イタリア、ベルギーは、西側でありながら一貫して参加を表明し、イギリスやオーストラリアなどは政府がボイコットを表明する中、NOC単位で参加をした⁶³。日本は、柔道の山下泰裕やマラソンの瀬古、バレーボールなどメダルが有力視された競技を中心に参加が望まれたが、その参加は叶わなかった⁶⁴。

つづく1984年ロサンゼルス大会は、いわゆる東側の国々がボイコットをし、ふたつのオリンピックは「片肺」と呼ばれた。⁶⁵

1988年、両陣営がそろったソウル大会で、東西のメダル争いはピークを迎える。

その後、1989年にベルリンの壁が崩壊し、90年の東西ドイツの統一、91年のソ連崩壊により、東西冷戦下の代理戦争としてのメダル獲得競争には、一応の終止符が打たれた。

5) オリンピックとナショナリズム

ここまで見てきたように、第二次大戦下や冷戦下のオリンピック大会は、政治的に利用されたと言われても致し方ないものであるだろう。そうした政治利用の際に、指摘されるのがナショナリズムの問題である。

多木は、1936年ベルリン大会を「オリンピックの歴史のなかで、こうした身体の政治性が表象されたという意味でも、それが見事な記録映画を作りだし、事実と映像の関係に新しい難問をもたらしたという意味でも…注目に値する」と述べ、1936年時にはすでに、オ

オリンピック大会が政治性を帯びていたと述べている。また、オリンピックは近代ナショナリズムに「浸透」されており、その勝敗には「国家の威信がかかる」とし、スポーツが「政治の文化的表象」になる側面を指摘している。⁶⁶

2. 日本を応援するという態度

ここまで見てきたように、オリンピックはその理想として政治とは無関係でイノセントであることを掲げながらも、政治と深く関わってきたと言えるだろう⁶⁷。そのため、戦前や東西冷戦下のオリンピック大会における自国選手の応援には、ナショナルの影がちらつく。しかし、近年、以下に述べるような、一見するとこれまでのナショナリズムとは異なる日本代表を応援するという態度が指摘されている。

今福は、最近のスポーツ大会における演出について、以下のように批判している。2003年の女子バレーのワールドカップ中継では、「他者を含む対抗的構図のなかで成立するスポーツゲームの基本的リアリティが…崩壊して」おり、その背景には、「たんにマスメディアの権力だけではなくて、おそらく国家的な、あるいはもっといえば、大衆における集会的志向性みたいなものを全部包括するような権力」があると指摘している⁶⁸。この女子バレーの中継における演出に対しては、「もう、バレーボールの『テレビ中継』ではない」という第一印象を述べ、「演出自体」の「異様」さを指摘し、そうした演出に対して「もどかし」く、「腹立たし」と述べている⁶⁹。また、こうした演出が「大衆迎合的なメディア演出」だともしている⁷⁰。

…まず、やたら陽気で騒々しいタレント応援団がいて、「NEWS」というジャニーズの若い少年たちが、ワールドカップバレーボール大会のテーマソングを歌ったということでそこに呼ばれているわけです。それがいわば一般ファンの代表のような顔をして、タレント応援団として実況中継に張り付いている。その少年たちがひっきりなしに画面に登場してくる。さらにその脇にインタビュアーのような役割を兼ねた女性タレントがいるわけですね。まずそういう外部における演出自体が異様な感じがしました。

もちろん選手自身も極限までアイドル的に演出されている。大山とか栗原といった一〇代の選手のクローズアップがプレーと直接関係なく挿入されて、その一挙手一投足、表情のわずかな変化も見逃さない。中継するアナウンサーはすぐに興奮して、涙を流して、(略)

さらに驚いたことがありました。バレーボールは二つのチームがコート両側に分かれてネットを間にやり取りするゲームです。それなのに、テレビではほとんど日本チームしか映らない、映さない。日本チームの選手の顔・表情・動き、ただひたすらに中継はそこに集中していました。⁷¹

西谷は、こうした演出を「少女漫画の世界とまったく同じような構成になってい」て、「ドラマ的」「コミック的」に「解説しやすい」ものであると述べ、同様の演出を試みた例として、2003年東京国際マラソンにおける高橋尚子⁷²をあげている。

…テレビが一生懸命型どおりにやろうとしているのに、競技の方がそこから剥離するようにして、メ

ッキを目立たせてしまったんですね。今回はレースのしばらく前に、高橋尚子がこの一年間どのような練習してきたかということが全部ドキュメンタリーで放映されましたね。つまりわれわれは彼女がこのレースに向けて、どういう訓練をしてきたか、ドラマ仕立てで見せられてほとんど知っているわけです。そして、…さあいよいよ、という雰囲気が作られている。

東京国際女子マラソンはオリンピックの切符を手にするまでの選考レースだとされていました。でもそれは始めから高橋が勝つことが予定されていて、ほかの誰かのためにあるのではない。出来レースではないけれど、それ以上に結果が「予定」されていて、その「予定」にあわせて実況中継が組まれている。おまけにその実況番組では、高橋尚子本人が出てくるわけです。

ここまでくると、あの番組そのものはマラソンという競技を伝えるためのものではなくて、高橋尚子を主人公にして、最強ランナー高橋を国民がこぞってアテネに送り出すためのセレモニーのようなものでした。(略)

とにかくそのとき、見ている視聴者にとってはっきりしたのは、このレースは競技会ではないんだということです。高橋を日本代表として送り出すためにイベントなんだと、そういうことがあからさまになった。⁷³

稲垣も同書の中で、これらは「メディアという一方的な暴力」だと言い、メディアにはスポーツを育てる気がなく、スポーツをどうするつもりなのか、という方向性がないと述べている。⁷⁴

阿部も、現在のオリンピックにおいて、かつてのナショナリズムの論理はリアリティと実効性を失いつつあり、国民国家のリアリティも容易に築き上げることができないと指摘している。

…スポーツの舞台で「祖国のために闘う」というアマチュアリズムと結びついたナショナリズムの論理は、…そのリアリティと実効性を失いつつあるように思われる。むしろ現実においては、競技する側も彼ら／彼女らに声援を送るファンの側も、グローバルに展開するコマーシャリズムの論理のなかでオリンピックを受容／消費している。その意味では、かつてベネディクト・アンダーソンが述べた「想像の共同体」としての国民国家のリアリティは、コマーシャリズムとグローバル化が手を携えて進行する現在のオリンピックにおいては、そう容易に築き上げることができないのではないだろうか。⁷⁵

同時に、阿部は『メディアの中のスポーツ』における『「ナショナルなもの」への欲望を歓喜／刺激するような語り』の必要性を言及しており、スポーツの語りにはかつてのナショナリズムとは異なるナショナルな物語が存在するとしている。

…オリンピックやワールドカップなどの国単位で競い合うスポーツの試合が報じられる際に、メディアの語りがナショナリスティックなトーンを強めがちであるということが、これまで批判の対象とされてきた。

たしかに、客観的で公平なスポーツ中継という基準に照らしてみれば、自国のチームや選手をことさら鼓舞するようなメディアの語りは、偏った／ナショナリスティックな報道として非難されるべきもの

であろう。しかしながら、「メディアの中のスポーツ」が人びとの人気を博するためには、ただ冷静に淡々と試合の進行を伝えるだけでなく、ときには人びとの「ナショナルなもの」への欲望を歓喜／刺激させるような語りが必要とされることは、疑いようのない事実である。その点でスポーツ実況中継には、常にすでに「ナショナルなもの」が影を落としていると言わざるを得ない。⁷⁶

ここで阿部の言う「ナショナルなもの」とは、「政治的な立場やイデオロギーとしてのナショナリズム（民族主義）とは微妙に位相を異にし」たものであり、「日常的な生活場面で感じ取られるより感覚的／情緒的な『ナショナルなもの』」である⁷⁷。阿部は1992年オリンピック長野冬季大会や1998年に制定された国旗国歌法（国旗及び国歌に関する法律）に『気分』としての『ナショナルなもの』の高まりを見出している⁷⁸。

香山は2002年の日本において、「あたかも自分が自分の意思で選び取った考えであるかのように」「日本という国が好き」という若者を「無邪気なプチナショナリストたち」と呼び、彼らが増加する社会背景を、精神医学の視点から明らかにしようとした⁷⁹。（「プチナショナル」、「ぷちなしょ」とも呼ばれる。）香山は『私が生まれた国ニッポン』を応援するのはあたりまえ」と考える現在の若者と、サッカーのロシア戦での勝利を「また日露戦争に勝った」と文字通り感じる戦争を経験した世代に共通する「屈託のなさ」を見出し、両者の線引きができるのかどうか、と問題を提起している⁸⁰。また、アメリカ、韓国、フランスを中心とするヨーロッパの“愛国状況”を眺め、「日本のあちこちで見られている“ぷちなショナリズム”の風景と、諸外国のナショナリズム的な雰囲気との間には、かなり違いがあることが明確だ」としている⁸¹。“ぷちなショナル”な例として内親王誕生、日本代表戦⁸²における国歌斉唱や日の丸による応援を、日本語ブームをあげ、こうした若者に見られる「屈託がない」傾向に対して、警鐘をならしている⁸³。

…問題は、いまのところサッカーの日本代表を応援するためだけに「日の丸」を振る世代と、「これは戦争だ。日本の誇りを賭けてがんばれ」と「日の丸」を振る旧世代とを線引きする手段はいまのところない、ということだ。そして両者はときとして自然にあるいは人為的に、攪拌されて均質になってしまうことがある。チームのために振っていた「日の丸」がいつのまにかくにそのものために振られている、という事態も起こりかねない。⁸⁴

それ⁸⁵古い世代に連想させる意味や歴史とは切り離され、明朗さや屈託のなさと共に描かれる「美しいニッポン」「強いニッポン」のイメージ。そこに関与している若い世代は「これは右翼とか左翼とか関係ないこと」と言うし、たしかにかつての愛国主義や国粋主義が持っていた“こわもて”の姿はどこにも見当たらない。しかし、「私はこの立場を選び取った」と言う自覚もないまま、…あたかも生まれた時からずっとそう思っていたように「ニッポンが好き」と言ったり、言わされたりしているということに、本当に問題はないのだろうか。⁸⁶

ここまで見てきたように、スポーツの国際大会で日本代表を応援するという態度は、現在の日本において広く見られる現象として確認されている。こうした態度は学術的な分野にお

いて、指摘されるだけでなく、世間一般でも受け入れられているものだと言うことができる。

『朝日新聞』の新聞紙面を作る運動部デスクの吉岡は、96年アトランタ大会期間中に、日本代表の勝利を伝える紙面に「踊るような見出しをつけた」と言い、「日頃意識したことのない『日本』がしきりに頭をよぎ」り、「日本と日本人を再認識している」とした⁸⁷。

¹ 橋本一夫、『日本スポーツ放送史』、大修館書店、1992年、11-12頁。

² 『同上書』、18頁。

³ 『同上書』、19頁。

⁴ 『同上書』、30-32頁。

⁵ 『同上書』、32頁。

⁶ 『同上書』、39頁。

⁷ 『同上書』、39頁。

⁸ 『同上書』、197頁。NJBは、現在の毎日放送である。

⁹ 『同上書』、195-199頁。

¹⁰ 『同上書』、82-93頁。

¹¹ 『同上書』、209-210頁。

¹² 『同上書』、216-217頁。

¹³ 『同上書』、235-236頁。

¹⁴ 『同上書』、237-238頁。

¹⁵ 『同上書』、132-133頁。

¹⁶ 『同上書』、234頁。

¹⁷ 『同上書』、54-55頁。

¹⁸ 『同上書』、55頁。

¹⁹ 『同上書』、43-49頁。

²⁰ 『同上書』、48頁。

²¹ 『同上書』、64頁。

²² 『同上書』、70頁。あまりに遅い場合は録音され、翌日早朝に放送された。

²³ 『同上書』、65頁。

²⁴ 『同上書』、72頁。

²⁵ 『同上書』、74-75頁。女子200m平泳ぎ決勝において、日本の前畑秀子とドイツのマルタ・ゲネンゲルの熱戦が繰り広げられた。その模様を伝えるラジオの実況放送が「前畑がんばれ！」と連呼し、大きな話題となった。

²⁶ 『同上書』、77-78頁。

²⁷ 『同上書』、78頁。

²⁸ 『同上書』、80頁。

²⁹ 日本オリンピックアカデミー編、『前掲書』、119頁。

³⁰ 橋本、『前掲書』、202-208頁。

³¹ 『同上書』、83頁。

³² 『同上書』、228、231頁。

³³ 日本オリンピックアカデミー編、『前掲書』、171頁。

³⁴ 橋本、『前掲書』、238頁。

³⁵ 『同上書』、245-246頁。

³⁶ 『同上書』、248-249頁。

³⁷ 『同上書』、243-244頁。

³⁸ 『同上書』、246頁。60年ローマ大会では短波を利用して、イタリアから日本への映像の遠距離伝送が行われた。この方法は1時間に15秒の映像を送ることが可能だった。

³⁹ 『同上書』、270頁。

⁴⁰ 『同上書』、271-272頁。

-
- 41 『同上書』、272 頁。NHK の調べた開会式の視聴率は、NHK、民放を含め 84.7%、人数にすると、約 6500 万にのぼる人が見たことになる。
- 42 『同上書』、273 頁。
- 43 『同上書』、287 頁。
- 44 武田、『前掲書』、129 頁。
- 45 『日本史 B』、実教出版、2008 年検定、323、326 頁。ヒトラーは、ナチ党（国家社会主義ドイツ労働党）の党首で、1933 年にドイツで独裁政権を樹立した。ドイツは、国際連盟を脱退し、フランス、イギリスらとの対立を強めていた。日本は、1933 年、盧溝橋事件に対するリットン報告書を不服として、国際連盟を脱退。1936 年、37 年にドイツ、イタリアと協定を結び、アメリカ、フランス、イギリス、ソ連との国際対立を深めていった。
- 46 武田、『前掲書』、129 頁。
- 47 『同上書』130 頁。
- 48 『同上書』130 頁。
- 49 『同上書』145 頁。1936 年 7 月 31 日決定。
- 50 『日本史 B』、327-328 頁。
- 51 武田、『前掲書』、146 頁。
- 52 『同上書』、146 頁。
- 53 『同上書』、147 頁。
- 54 『同上書』、145 頁。
- 55 『同上書』、147 頁。
- 56 『同上書』、147 頁。
- 57 須田泰明、『37 億人のテレビンピック 巨額放映権と巨大五輪の真実』、創文企画、2002 年、104 頁。ソ連は、オリンピックとは別の「スパルタキアード」（全ソ連スポーツ大会）を独自に行っていた。
- 58 『同上書』、103 頁。ソ連の加盟は、1951 年 IOC 総会で正式に認められた。
- 59 『同上書』、創文企画、2002 年、103-105 頁。
- 60 武田、『前掲書』、183 頁。
- 61 『同上書』、237-240 頁。
- 62 『同上書』、246 頁。
- 63 『同上書』、241 頁。
- 64 『同上書』、244-247 頁。
- 65 『同上書』、242 頁。
- 66 多木浩二、『スポーツを考える』、ちくま新書、1995 年（2009 年）、69 頁。
- 67 『同上書』、69 頁。
- 68 今福（他）『近代スポーツのミッションは終わったか 身体・メディア・世界』平凡社、2009 年、31-32 頁。
- 69 『同上書』、27-29 頁。
- 70 『同上書』、32 頁。
- 71 『同上書』、27-28 頁。
- 72 高橋尚子は 2000 年シドニー大会の金メダリストであり、東京国際マラソンの優勝において 2 度目のオリンピック大会出場を決めることが有力視されていた。しかし、結果は 2 位というものだった。
- 73 今福（他）、『前掲書』、32-37 頁。
- 74 『同上書』、224-226 頁。
- 75 阿部潔、『スポーツの魅惑とメディアの誘惑 身体／国家のカルチュラル・スタディーズ』、世界思想社、2008 年、246 頁。
- 76 『同上書』、88-90 頁。
- 77 阿部潔、『彷徨えるナショナリズム オリエンタリズム／ジャパン／グローバリゼーション』、世界思想社、2001 年、14 頁。
- 78 『同上書』、2001 年、15-19 頁。
- 79 香山リカ、『ぶちナショナリズム症候群 若者たちのニッポン主義』、中央公論新社、2003 年、5-10 頁
- 80 『同上書』、24 頁。

-
- 81 『同上書』、50 頁。
- 82 主として、**FIFA2002** ワールドカップ（サッカー）で日本代表を例にしている。
- 83 香山、『前掲書』、11-54 頁。
- 84 『同上書』、28-29 頁。
- 85 日本語ブーム、朗読。ここでは戦時下の愛国詩朗読運動の国民主義的な高まりと朗読ブームの共通点を危惧している。
- 86 香山、『前掲書』、35-36 頁。
- 87 『朝日新聞』（夕刊）1996 年 7 月 25 日 1 面。

第Ⅱ章 7つのオリンピック大会とメディア

本章では、新聞やテレビ、雑誌などのその他メディアにおいて、オリンピックがどのように扱われたのかを見ることで、第Ⅰ章において指摘された、広く浸透した日本を応援するという態度の形成と発達の過程を明らかにしていく。

なお、本研究において、84年ロサンゼルス大会を起点としたのは、この大会が、放映権やその他の多くの点でオリンピックのひとつの大きなターニングポイントであると言える大会であるためである¹。そのことは以下のようにオリンピック大会中の『朝日新聞』朝刊1面におけるオリンピック大会関連記事の有無からも見てとることができ、84年ロサンゼルス大会からオリンピック大会のメディアでの扱われ方が大きく変化したと言えるだろう。

表1 オリンピック大会期間中の『朝日新聞』1面における関連記事

	大会日数(a)	五輪記事の あった日(b)	% (b/a)
64東京	15	13	87%
68メキシコシティ	15	2	13%
72ミュンヘン	16	8	50%
76モントリオール	15	3	20%
80モスクワ	14	1	7%
84ロサンゼルス	15	15	100%
88ソウル	16	16	100%
92バルセロナ	16	15	94%
96アトランタ	16	16	100%
00シドニー	17	17	100%
04アテネ	17	17	100%
08北京	18	18	100%

(資料より、落合作成)

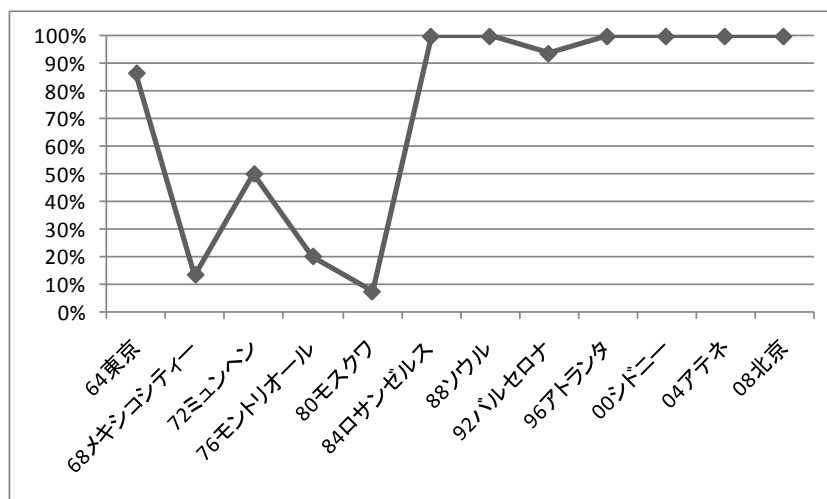


図1 オリンピック大会期間中の『朝日新聞』1面における関連記事 (資料より、落合作成)

終点を08年北京大会としたのは、2012年ロンドン大会が先に述べた84年ロサンゼルス大会同様、オリンピック史上重大なターニングポイントとなりうる大会、と考えたためで

ある。2012年ロンドン大会は、世界的な経済不況を招いたリーマンショック後、初めて行われた大会であったことに加え、スポーツとメディアを考える上でも大きな変化を迎えた大会であったと言える。それは、TwitterやFacebook等のソーシャルネットワークサービスがひろく一般的なものとなり、選手自身が情報を発信したという点においてである。他にも、NHKがインターネットを通じて、テレビ放送のない競技や種目（日本人選手が出場しないものを含む）を配信したことも、大きな変化と言っていいだろう。SNSを通じて選手と直接つながることができる、動画配信でテレビ放送に関係なく観たい競技を観ることができる、これらのことは、オリンピックをはじめとするスポーツとメディアの関係に大きな変化を与えるだろう。

本研究において、そうした2012年ロンドン大会における変化までをも網羅することはできない。ターニングポイントである2012年ロンドン大会以降の大会の研究につなげるためにも、本研究では、2012年ロンドン大会前の08年北京大会までの、日本人のオリンピックにおけるメディアでの描かれ方の変化を明らかにする。

1. 新聞

本研究で対象とした新聞は、『読売新聞』（以下『読売』と略す）及び『朝日新聞』（以下『朝日』と略す）（東京版）である。両紙は、発行部数全国1位2位の新聞である²。使用した新聞記事は、データベース（ヨミダス歴史館、聞蔵Ⅱ）または新聞の縮刷版をもとにしている。

（1）内容的変化

まず、『読売』『朝日』の1面を対象として、オリンピックの伝えられ方の変化を、80・90・00年代に分けて見ることで、新聞に見られる日本代表を応援するという態度の形成に貢献すると考えられる特徴を明らかにする。

なお、ここで1面を対象としたのは、そのニュースとしての重要度と影響力を考えたためであるが、1面の記事は状況に大きく依存するということも忘れてはいけないうだろう。例えば、88年ソウル大会は昭和天皇の病状が大きく伝えられたため、大会に関する記事はプライオリティが低いと思われ、小さな扱いになったことが考えられる。

1) 84年ロサンゼルス大会・88年ソウル大会

1964年東京大会において、金メダルを獲得したバレーボール女子は「東洋の魔女」愛称で親しまれ、その後も高い人気を維持し続けた。84年ロサンゼルス大会においてもその人気は健在で、開会式当日の『読売』（朝刊）1面において、「さあ、やるぞ！期待の日本女子バレーボールチーム」³という見出しの写真付きで、紹介されている。『読売』（夕刊）や『朝日』（朝刊）においては、韓国、ペルーに予選リーグで勝利を収めたということが写真付きで伝えられている。（ペルーからの勝利で決勝ラウンドへの進出が決定。）「金メダルの

本命、日本のバレーボール女子…」⁴という本文からも、当時の注目の高さと期待の大きさを見て取ることができる。そんな日本チームは、準決勝で中国に敗れ、3位決定戦でペルーに勝利し、3位という結果を残した。準決勝における日本チームの敗戦を、『読売』は「日本が世界チャンピオン中国のパワーに1セットも奪えず完敗、五輪参加史上最悪の三位以下が決まった」⁵と伝えた。これは、64年東京大会から続くバレーボール女子の歴史を想起させるものと言うことができるだろう。その一方で、『朝日』の1面では、日本の敗戦について触れられていないことから、そうした記述は当時、日本の敗戦を伝えるのに不可欠なものではなかったと考えられる。その後の3位決定戦での勝利については、以下に見るように、両紙とも夕刊の見出しにして伝えている。

女子バレーは「銅」

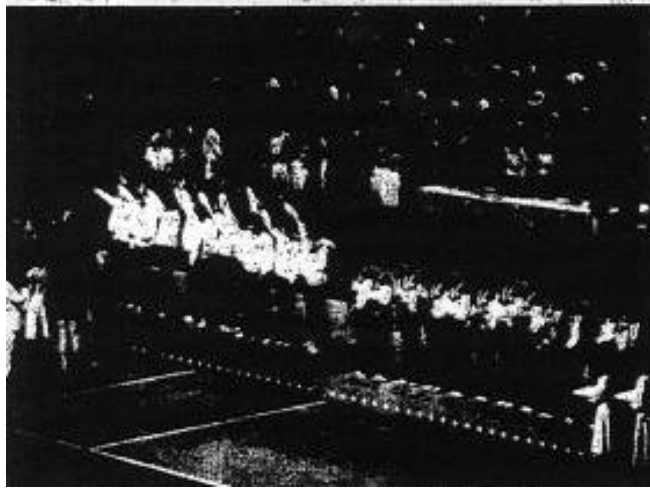
…日本チームが対中国完敗のショックを乗り越え、食い下がるペルーを3-1で振り切り銅メダルを確保した。⁶

女子バレー「銅」…ペルーを3-1で破り、銅メダルを獲得⁷

この後、決勝戦が行われ、中国が優勝を決めると、両紙は写真入りで中国の優勝を伝えた⁸。この時使われた写真は、『朝日』が優勝した瞬間の中国チームの写真（写真1）、『読売』が中国と日本チームがどちらも入る表彰式のものであった（写真2）。このふたつの写真は、優勝した中国を意識したものと言うことができる。



（写真1）

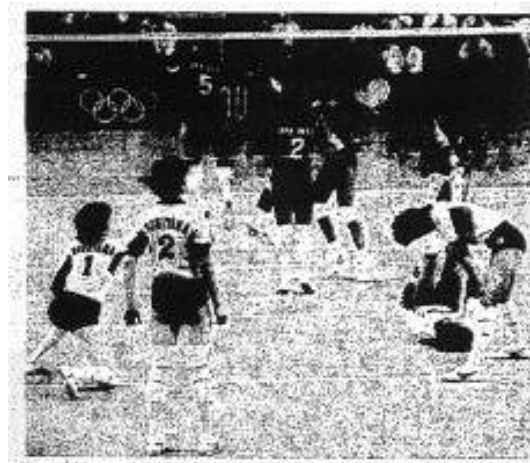


(写真2)

88年ソウル大会、バレーボール女子は4位という結果に終わり、「参加した五輪で初めてメダルなしに終わ」⁹った。準決勝ペルー戦での敗戦について、両紙は、敗戦直後のうなだれる日本チームの様子を写した写真入りで伝えている¹⁰ (写真3、4)。



(写真3・朝日)



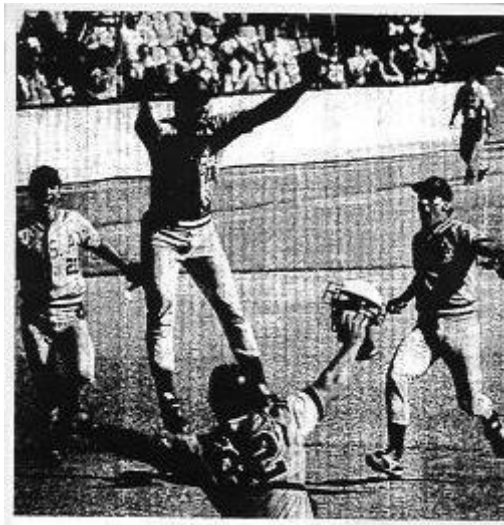
(写真4・読売)

どちらも、うなだれる日本チームに焦点を当てた写真であるが、日本チームだけを切り出したのではなく、反対側のコートで喜ぶペルーチームについても写真のフレームにおさまっている。これにより、日本の敗戦はより劇的に伝えられたとすることができるだろう。また、決勝戦後には、バレーボール女子の最終的な順位が伝えられる。しかし、そこに写真や見出し等はなく、本文で触れられているのみであり、前回のロサンゼルス大会で中国の優勝を写真入りで伝えたときとの変化を見ることができる。こうした変化からバレーボールという競技の世界一のチームよりも、日本チームの勝敗の結果を伝えようとしていることができるのではないだろうか。

こうした変化は、84年から88年において、野球には見られないものである。

84年ロサンゼルス大会において、野球は公開競技として採用された¹¹。日本は決勝戦でアメリカを破り、優勝した。しかし、この結果は写真を用いて1面で大きく取り上げられることはなく、見出しと本文で結果が伝えられるのみになっている。なお、『朝日』においては、見出しにもなっておらず、小さな扱いとなっている¹²

88年ソウル大会では、決勝でアメリカに敗れ、2位という結果であった。この結果を、『朝日』は優勝を決めて歓喜するアメリカの写真によって伝えている¹³ (記事5)。



(記事5)

ここで、注目したいのは、敗戦にうなだれる日本チームではなく、歓喜するアメリカチームの写真が使われている点である。先にバレーボールで指摘したような傾向は、この試合の野球においては見る事が出来ない。なお、『読売』においては「公開競技の野球は決勝で日本対米国に敗れ、連続優勝はならなかった。」¹⁴と、本文で結果に触れているだけであり、日本の敗北による悲壮感などを強く感じさせる内容でない。

なお、当時の野球は、プロ選手の参加が認められておらず、64年の東京大会時から、「東洋の魔女」として人気を博したバレーボール女子とは、選手一人ひとりの知名度が大きく異なることが、考えられる。

ここまで見たように、ステージ1では、世界一よりも日本代表に焦点が当たる傾向を、バレーボールを例に、わずかではあるが、見る事ができた。また、84年ロサンゼルス大会において、20年前の64年東京大会の「東洋の魔女」に関する記述があり、バレーボール女子日本代表チームという連続した歴史を感じさせる記述が見られた。

2) 92年バルセロナ大会・96年アトランタ大会

ステージ2では、ステージ1で見る事のできた「世界一よりも日本代表」、「オリンピックという歴史の中の日本」に焦点を当て、それらの特徴がステージ2においては、どのように変化しているのかを見る。その上で、このステージにおいて新たに見ることのできる特徴を指摘する。

《世界一よりも日本代表》

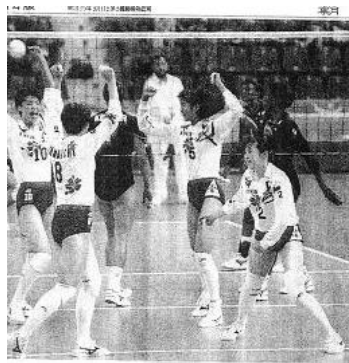
92年バルセロナ大会においても、バレーボール女子の関心度は高かった。開会式当日の『読売』(朝刊)では、写真付きで、ランニングをする男女チームの様子が伝えられている

15 (写真6)。

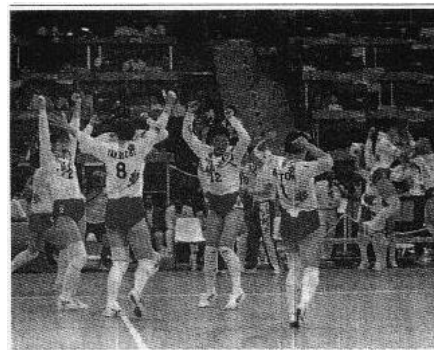


(写真6)

また、予選リーグで日本がアメリカに勝利した際には、両紙とも朝刊に写真入りでその結果を伝えている¹⁶。使われている写真はどちらも歓喜する日本チームのものである (写真7、8)。



(写真7・朝日)



(写真8・読売)

その後、チームは決勝トーナメントに進出するものの、1回戦（準々決勝）でブラジルに敗れた。その結果を『読売』は、うなだれる日本チームの奥にブラジルチームが見える写真を使って、伝えている¹⁷ (写真9)。



(写真9)

ここにも、88年ソウル大会同様の、日本よりも実力が上のチームについて伝えることよりも、日本に勝った敵としての描かれ方を見ることができる。なお、その後の1面にバレーボール女子に関する記述はなく、優勝チームがどこであったかを伝える記事もない。このことから、実力的に世界一には及ばない日本チームが国内の人気から開幕前から注目を集めていたと言える。また、優勝したチームの記述がないことから競技そのものへの関心よりも、日本代表への関心が強いことがうかがえる。また、以下に続く96年バルセロナ大会を見ると、この関心は64年東京大会における「東洋の魔女」を祖とする強いバレーボール女子日本代表に向けられたものだと言える。

96年バルセロナ大会のバレーボール女子は予選リーグ敗退という結果に終わった。そのため、『読売』においてバレーボール女子に関する記述は、本文に1度登場するのみである。その内容も、「バレーボールの女子は米国にストレート負けして九位以下が確定し、過去最低の成績となった。」¹⁸と結果だけを伝えるもので、選手の表情や試合の経過に関する記述はない。『朝日』においては、1面に2度登場するが、『読売』と同様の傾向を見て取ることができる。

女子バレーボールも韓国にストレート負けした。¹⁹

日本女子バレーは米国にストレートで敗れ、決勝トーナメント進出の可能性が消えた。²⁰

これは、実力の低下に比例して、大会期間中の関心も低下したことを意味している。そんなバレーボールに代わるかのようにして、注目を集めるようになるのが、96年アトランタ大会から正式競技になった同じ女子の団体球技であるソフトボールである²¹。96年アトランタ大会において、ソフトボールは予選リーグを突破し、決勝トーナメントに進出した。『読売』は予選リーグ中国戦での勝利を「ソフトボール 強豪・中国を完封」の見出しで、力投する渡辺伴子の写真とともに伝えている²² (写真10)。



(写真10)

結局、ソフトボールは4位という結果に終わってしまい、それ以外で大きく伝えられることはなかった。ここにも、世界一よりも日本代表という姿勢を見ることができる。

次に、ステージ1において、負けた日本代表ではなく、世界一のアメリカに焦点をあてていた例としてあげた野球であるが、92年バルセロナ大会では、変化が見られる。92年バルセロナ大会において、公開競技から正式種目となった野球において、日本は韓国準決勝で敗れ、3位決定戦でアメリカに勝利し、銅メダルという結果を残した。その結果を『朝日』(夕刊)は写真入りで、以下のように伝えている。なお、ここで使われている写真は、監督を胴上げする日本チームのものである(写真11)。

日本が銅、金はキューバ

今大会から正式競技になった野球の三位決定戦で日本は米国を8・3で破って銅メダルを勝ち取った。

公開競技だった一九八四年ロサンゼルス大会の金、八八年ソウル大会の銀に続く銅メダル獲得。決勝では、キューバが台湾に大勝して予選から無敗での「完全優勝」を果たし、アマ球界世界一と称された実力を五輪の舞台で証明して見せた。²³ (下線は筆者。以下、同じ)



(写真11)

ここには、2つ注目すべき点があるだろう。1つは使われている写真が、3位決定戦に勝利し、監督を胴上げする日本チームのものであるという点である。予選から無敗での『完全優勝』を果たしたキューバチームの実力を「アマ球界世界一」と賞しながらも、紙面で使用している写真は、日本チームのものなのである。ここに、野球そのものへの関心よりも日本代表への関心の高さを見ることができる。先にあげた84年ロサンゼルス大会のバレーボール女子も、3位という結果であったが、当時、1面に使われた写真は優勝した中国に関するものであったことから、変化は明らかだろう。

《オリンピックという歴史の中の日本》

2つ目は、84年ロサンゼルス大会、88年ソウル大会に「続く」結果であるとしている点である。同じ競技であるものの、84年から92年では8年の歳月が流れていることや、日本チームはオリンピックのために選抜された選手で構成されていることから、それらは別のチームと言うことができるだろう。それにもかかわらず、野球日本代表としての連続性が強調されている。『読売』では、写真はないものの、以下のように大きく取り上げている。

野球は米に快勝し3位

今大会から正式競技になった野球の三位決定戦で、日本は打線の活躍で米国に8-3で快勝、銅メダルを獲得した。正式競技のボールゲームで日本がメダルを獲得したのは、ロス五輪の女子バレーボールが三位になって以来のこと。²⁴

ここでは、「正式競技のボールゲーム」でのメダル獲得として、ロサンゼルス大会の女子バレーに関する記述が見られる点に注目すべきであろう。バレーボールと野球、女子と男子、全く異なる競技のふたつが日本代表という枠組みの中であたかもひとつづきの歴史かのように語られているのである。

話が少し前後してしまうが、先に《世界一よりも日本代表》において指摘したバレーボール女子においても 92 年バルセロナ大会本文において『朝日』では、「日本の女子バレーは準々決勝でブラジルに敗れ、ソウル五輪で失ったメダル奪回の夢は消えた。」²⁵と、それ以前のオリンピックにおけるバレーボールの歴史を感じさせる記述が見られ、ステージ 1 で見た特徴と同様の傾向をステージ 2 においても見る事ができたと言うことができる。

ここまで見てきたように、オリンピックという歴史の中の日本という記述のされ方は、競技内においてはもちろん、競技を超えて行われるものである。

《報道から個人の歴史へ（選手の話と署名記事の登場）》

96 年アトランタ大会において、野球の日本チームは、決勝戦へと駒を進めた。そのことを、『朝日』（夕刊）は「野球が決勝進出 11-2 米下す」²⁶、『読売』（夕刊）は「野球、決勝に進出 11-2 強豪・米を破る」²⁷という見出しで、大きく伝えている。なお、『読売』の記事は、写真入りである。翌日の『読売』（朝刊）には、「野球きょう決勝」²⁸という見出しが見られ、注目の高さがうかがえる。

決勝戦、日本はキューバに敗れ、2 位という結果に終わった。両紙とも夕刊において、この結果を写真入りで伝えている。『読売』においては「9 対 13 壮絶打撃戦」という見出しで、試合の細かな情報と共に以下のように本文を締めくくっている。

だが、最後まであきらめない戦いぶりに川島全日本の真価があった。ウイニングランのキューバとともに「日の丸」を掲げて、場内を一周。ナインの表情には全力を尽くしたあとの輝きがあった。²⁹

ここに、今まで結果や歴史の連続性の強調とは異なる絵的な描写とドラマ性を見ることができる。

つづいて、柔道の田村亮子と野村忠宏に関する両大会の記述を見ることで、そうした日本人選手の描かれ方の変化を、より詳しく見てみる。高校生ながら、92 年バルセロナ大会、に出場した田村亮子は、大会前から大きな注目を集めていた。結果は、決勝戦でフランスのノワクに敗れ、2 位というものであったが、両紙とも夕刊において写真入りで、健闘をたたえる内容の記事を書いている。『朝日』では、表彰式において I O C 委員から祝福のキスをうける田村³⁰、『読売』では決勝戦でノワクと戦う田村³¹、の写真がそれぞれ使われた。なお、『朝日』は、本文で「『YAWARA ちゃん』こと田村亮子」³²というかたちで、田村のニックネームを登場させている。

96 年アトランタ大会において、田村は銀メダルという結果を残した。この結果は、男子の野村の金メダルと共に、両紙とも写真入で大きく伝えられた³³。『朝日』では、以下に見るように田村を「ヤワラちゃん」と呼び、署名記事で前回のバルセロナ大会、そして今回に至るまでの彼女の思いや、表情、周囲の情景等にも触れながら、事細かに描いている。田村を破った相手選手については、いかに伏兵であったかを書き、最後はドラマチックな会場の描写で締めくくっている。なお、『朝日』のこの記事が、今回見た両紙における署名

記事の初出である。

田村 再び無念の「銀」 無名の16歳「強かった」 84連勝の果て 20歳の涙

ヤワラちゃんが負けた。

女子柔道 48^キ級決勝戦。誰もが田村亮子(二〇)の金メダルと笑顔を信じて疑わなかった。一九九二年のバルセロナ五輪後、積み重ねた連勝は84。あと一勝で金メダルだった田村の前に、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）からきた無名の高校生が、大きく立ちはだかった。

ケー・スンヒ。国外に出たのは生まれて初めてという十六歳。…五輪が、国際大会への初登場という謎（なぞ）の選手だ。

…四年前の自分と同じ十六歳の高校生に負けた田村は「悔しいです。でも、これがオリンピック私も若いインドニーで三度目の正直をねらいます」と話した。

アトランタの朝は、薄もやだった。田村は、この日のために努力してきた。午前八時に試合場に入った。顔は緊張と自信が同居している。練習場では…

いよいよ試合が始まった。…病院に入院している間も考えたのは柔道のことばかりだ。自信たっぷりのサボンを鮮やかに一本勝ち。84連勝だ。

決勝。…「強いなあ」。…効果と指導で2ポイント取られ、優勢負け。

その瞬間、田村は、5秒ほど座り込んだ。「負けてすいません。相手は力強い選手だった」

…選手村に帰って部屋で一人で泣いた。銀メダルを見て、「負けたんだ」としみじみ思った。

…あと一步で、夢に見た金メダルに届くはずだった。

華やかな表彰式が終わった。ヤワラちゃんの夢が遠のいた量には、激しい闘いを演じた選手の体が、こすれて刻んだ無数の跡が残った。（アトランタ 26 日＝笠原雅俊）³⁴

ここに、単なる試合の経過や結果だけではない、田村個人の歴史を見ることができる。また、『朝日』は優勝した野村ではなく、2位の田村を大きく扱っていることから、日本人選手においても、競技の結果ではなく注目度の高い選手にスポットをあてていると言うことができる。

『読売』においては、署名記事はないものの、二人の発した言葉を「野村選手の話」「田村選手の話」として、載せている。

野村選手の話「決勝の相手には、前に一度負けているので、絶対に勝ちたかった。最後は執念と根性。

でも、あんまり緊張しないで、自分の柔道ができた。当分は柔道着は着たくない」

田村選手の話「やっぱり悔しい。決勝は集中力というか、気持ちの盛り上がりが……。どう攻めるか固まらないうちに試合に出た感じだった。バルセロナからの四年間はあっという間だった。こちらから四年間をどう頑張ろうか……」³⁵

また、『読売』は記事の中で、野村について「柔道との出会い」や「天理高時代の高校総体」、「天理大学進学後」といった競技歴から、祖父、母、父、叔父という家族に関することま

で触れられており、個人の歴史が書かれているとすることができるだろう。なお、『読売』において、野村は田村よりも大きく扱われている。

《マラソン女子・有森裕子》

ステージ2の最後に、2つの大会におけるマラソンの有森裕子の記述について見てみる。92年バルセロナ大会において、有森裕子は、銅メダルを獲得した。この結果は、両紙の朝刊において、レース後の写真入で大きく取り上げられている。『朝日』では、優勝したEUNのエゴロワと有森が抱擁する姿が、『読売』では、花束と日の丸を持って笑顔を見せる有森の姿が載せられている。なお、本文に目を向けると、どちらも、簡単なレースの流れが書かれているだけで、詳細な有森裕子の人柄や個々に至るまでの経緯については書かれておらず、64年前の人見絹江と関連付けられた記述が目につく。

マラソン 有森が銀 女子陸上 64年ぶりのメダル

前日第八日には、陸上女子マラソンで有森裕子（リクルート）が快走。2時間32分49秒で二位に入った。日本の女子が陸上でメダルを獲得したのは、一九二八年のアムステルダム大会八百位、二位の人見絹枝以来、六十四年ぶり、史上二人目。

女子マラソンの優勝は、マレンティナ・エゴロワ（EUN）で2時間32分41秒。スタート時の気温が三〇度を超す厳しい条件の中で、昨年の世界選手権四位の有森は30℃付近で三位集団から離れ、トップを走るエゴロワを追った。36℃付近で並び、急坂の競り合いにも耐えたが、競技場直前でわずかに遅れた。³⁶

有森「銀」マラソン 女子陸上 64年ぶりメダル エゴロワ優勝 山下は5位

【バルセロナ2日=読売取材団】日本女子陸上に六十四年ぶりのメダル―第二十五回夏季オリンピック大会第八日の一日、女子マラソンで有森裕子(二五)(リクルート)が一位から8秒差の2時間32分49秒で二位に入る健闘をみせて銀メダルを獲得した。日本の女子陸上のメダリストは、一九二八年アムステルダム大会八百位の人見絹枝(故人)の二位以来で、六十四年ぶり二人目の快挙だった。

優勝は、大接戦の末、最後で有森を振り切ったマレンティナ・エゴロワ（旧ソ連合同チーム=EUN）で2時間32分41秒。世界選手権二位の山下佐知子(二七)（京セラ）も五位に入り、二人の入賞で、日本の女子マラソンが世界のトップレベルであることを印象づけた。³⁷

96年アトランタ大会においても、有森は3位という結果を残す。ここでも、これまで指摘してきたような、世界一よりも日本代表という伝えられ方やオリンピックにおける日本代表の歴史を見ることができる。

両紙は、有森の3位という結果を、写真入りで大きく伝えている。両紙とも使用している写真は、ゴール直前または直後の苦痛をにじませながら安堵らしき表情を浮かべる有森のものである。また、「銅でも悔いはない」³⁸、「後悔したくない 私らしく走った」³⁹という見出しで、有森の話を掲載している。

ここまで見てきたように、ステージ2においては、それまでの結果の羅列という報道的

要素が強かった紙面から、署名記事に代表されるように選手個人の歴史を描いたものに、だんだんと変化していった。ここで、その変化を緩やかなものと指摘したのは、それらは突然に現れた表現の方法ではなく、選手の話のように報道と個人の物語の歴史の中間とも言うことのできる内容が見られたためである。また、ステージ1において、その萌芽が見られた世界一よりも日本代表という傾向は、ステージ2において、より強化されたと言うことができるだろう。この日本代表としての描かれ方は、オリンピックにおける日本代表の歴史という枠組みの中で伝えられることが多かった。

3) 00年シドニー大会・04年アテネ大会・08年北京大会

ステージ2では、『朝日』において、署名記事の登場を見ることができた。署名記事は記者が責任を持って書くもので、事実の報道というより、物語の描写という要素が強い。ステージ3では、これまで見てきた競技や選手に競泳の北島康介を加えて、そうした物語の描かれ方を見ていく。なお、『朝日』における署名記事の初出は、先に指摘したように1996年アトランタ大会であるが、96年アトランタ大会、00年シドニー大会において、『朝日』は不定期に署名記事を掲載している。『読売』はこれから見ていく00年シドニー大会において、署名記事が初出し、それ以降、紙面において必ず掲載されている。

《バレーボール女子とソフトボール》

00年シドニー大会において、出場権を逃したバレーボールと正に取って代わるように、ソフトボールが実力を発揮し、2位という結果を収めた。

ソフトボールは、予選リーグから決勝戦にいたるまで、両紙において、写真も交えながら、大きく取り扱われている。『朝日』では、4度見出しとして登場し、うち、3回が写真入りのものであったし、『読売』では、3度見出しとして登場し、うち、2回が写真入りのものであった。また、どちらの紙面においても、以下に見るように、3位以上が決まった際、決勝進出が決まった際、2位という結果が出た際に、女子団体競技として、84年ロサンゼルス大会以来、76年モントリオール大会のバレーボール以来という内容の記述が見られた。

ソフト、メダル確定

ソフトボールの日本は、延長十回の末にカナダを下して5連勝。予選リーグ二位以内が決まり、銅メダル以上が確定した。⁴⁰

ソフトメダル確定

ソフトボールの日本はカナダに競り勝ち無傷の五連勝、初メダル（三位以上）が決まった。女子の団体競技では八四年ロサンゼルス五輪のバレーボールの銅以来で、バレーボール以外では初めて。⁴¹

ソフト決勝進出

決勝は二十六日午後五時半（日本時間）から行われ、日本の球技では一九七六年モントリオール五輪のバレーボール女子以来となる金メダルを目指す。⁴²

ソフト日本、力尽き「銀」 延長8回、米にサヨナラ負け

ソフトボールでは、予選リーグから負け知らずの8連勝で決勝に臨んだ日本は延長の末、前回優勝の米国にサヨナラ負けし、五輪の球技では男女バレーボールだけだった金メダル獲得をあと一歩で逃した。⁴³

日本ソフト「銀」 夢届かず

(前略) 悲願の金メダルを逃した。日本女子の球技では一九八四年ロサンゼルス大会以来十六年ぶりのメダル獲得となった。⁴⁴

日本は、決勝戦でアメリカに敗れてしまったわけだが、この結果を伝える紙面において使われた写真は表彰式の日本チームのものであり、今まで見てきたような世界一よりも日本代表を、という傾向を見ることができる。

04年アテネ大会、ソフトボールにおいて、日本は銅メダルという結果を残すものの、写真などを用いて、1面で大きく取り上げられることはない。これは、資料に見るように他競技における日本選手の活躍が目覚ましかった大会であるからだと、考えられる。ここに、ステージ1で見た「東洋の魔女」から引き継ぐ国内での人気を誇るバレーボールとの、大きな違いを見ることができるだろう。

同大会においてバレーボール女子は、「メグ・カナ」と呼ばれた栗原恵、大山加奈を中心に大々的にメディアに取り上げられ、国民の大きな人気を得ていた。その人気ぶりは開会式の入場行進において、彼女たちを中心とした写真が『朝日』の1面に使われていることからわかる⁴⁵。しかし、人気とは裏腹に、結果は辛うじて予選リーグを通過しての5位というものに終わった。そのため、両紙の1面において、その後、写真や見出しにバレーボール女子が登場することはない

08年北京大会において、ソフトボールは、00年シドニー大会ほど予選リーグから注目を集めていたわけではなく、1面に大きく登場するようになるのは、準決勝でアメリカに負けてからである。『朝日』では、「ソフト 米に敗れる 準決勝」の見出しで、写真入で投手の上野由岐子の「ぼうぜんと打球を見送る」様子が伝えられている⁴⁶。なお、同日の『読売』では以下のように本文で触れるに止まっている。

ソフトボールの準決勝で、1次リーグ2位の日本が1位の米国と対戦、延長9回、1・4で敗れ、午後5時（日本時間同6時）からの3位決定戦に回った。そこで負ければ、銅メダルが確定、勝てば21日の決勝で再び米国と対戦する。⁴⁷

この3位決定戦日本は勝利し、翌日の決勝戦へと駒を進めた。この準決勝（延長9回）、3位決定戦（延長12回）を上野は1人で投げきり⁴⁸、大きな話題となった。このことを、両紙は写真入で取り上げている。写真は、『朝日』が試合後、チームメイトと喜び合う上野のもので、『読売』が試合中の上野のものである。本文の内容は、『朝日』の「連続で延長 上

野投げ切った」⁴⁹、『読売』の「上野 昼夜の 318 球」⁵⁰という見出しからもわかるように、上野に関するものが中心となっている。なお、どちらも署名記事である。

決勝戦も上野は 7 回を投げきり、日本は優勝する。両紙ともその結果を朝刊において、写真入りの署名記事で伝えている。『朝日』は優勝を決めた上野を中心とした日本チームの写真、『読売』は優勝を決めた直後仲間に肩車される上野と表彰式の日本チームの 2 枚の写真それぞれ使っている。上野に関する記事は、両紙とも子ども時代または高校生の頃のことに触れている。以下が、決勝戦後のソフトボールに関する記事である。

上野完投

（前略）高校時代に、一度、ソフトボールをやめようと思ったことがある。相手にまったく打たれなくなったときだ。勝って当たり前、抑えて当たり前に思われるのが、たまらなく嫌だった。実業団に入って、打たれるようになってうれしかった。

「打たれるから続けられる。そしてまた打たれるの繰り返しなんです」

この 4 年間、米国に打たれ続けた。今大会もそうだった。前日も、好投しながら延長九回に 4 点を失って敗戦投手に。それでも、自らの右腕で次の戦いを乗り越え、もう一度、米国への挑戦権を勝ち取った。318 球プラス 95 球。2 日間の戦いは、打たれても挑戦し続けた、上野の投手人生そのものだった。（三橋信）⁵¹

鉄腕上野 耐えて 413 球

（前略）幼稚園に入る前、父正道さん(52)が草ソフトボール大会で勝って持ち帰った金メダルにあげた。「頑張ったら、もらえるんだ。私もほしいなあ」

小学校にあがった。父が廃材で、ストライクゾーンにだけ穴を開けた板を作ってくれた。…

中学生になった。部活の練習だけでは物足りなくなった。帰宅後母京都(52)を連れ出し、…

福岡市立柏原中学 3 年のとき全国優勝。周囲から「由岐子ちゃんは才能があるから」と言われた。

（略）大人になっても、その姿勢を貫いた。

朝 4 時に起きて、走った。夜はゴムチューブを引っ張った。「自分の持っている 24 時間をどれだけソフトボールのために使っているかが結果につながる」。本を読むときも、腹筋運動をした。

（略）世界一のピッチャーになる自信はあった。そのために世界一の練習を積んできた。

決勝は 95 球。耐えて、乗り越えた。右肩は最後までもった。「マウンドで鳥肌が立った。まだまだ投げられます」（平井隆介）⁵²

どちらの記事においても、現在の社会人リーグで活躍する前の上野に関する記述が見られ、上野の個人の歴史を伝えるものとなっている。ここで両紙の記事が署名記事であることについては、先に指摘した通りである。この署名記事については、つづくマラソン女子の個所で詳しく見ていく。

なお、『読売』は、決勝戦の結果を朝刊で伝えた日の夕刊においても、写真（記者会見の様子）入りの記事を書いていることから、ソフトボールに向けられた注目の高さがうか

がえる⁵³。

一方、バレーボール女子は、08年北京大会も04年アテネ大会に引き続き、5位という結果に終わり、紙面での扱われ方も、04年アテネ大会と同様のものとなる。なお、08年北京大会では、開閉会式においても、バレーボール女子の写真は見当たらなかった。08年北京大会はソフトボールやサッカー、バドミントン、柔道などの競技で女子選手の活躍が目立った大会であり⁵⁴、バレーボールはその流れの中で、忘れ去られてしまった感がある。

《マラソン女子・高橋尚子、野口みずき》

00年シドニー大会において、高橋尚子は日本の陸上女子選手として初めて、金メダルを獲得する。『朝日』は、ゴールの瞬間のガッツポーズをする高橋の写真と共に、運動部記者によって書かれた署名記事を掲載した。この記事では、高橋を「舞台女優」と呼び、これまでの怪我や練習に触れながら、途中で彼女の言葉も交えて、ノンフィクションさながらの描写力で書かれている。

難コース克服。「すごく楽しい42キロでした」 運動部 恵藤公浩

シドニーの春の日差しと、大歓声に迎えられた。

両腕を突き上げ、フィニッシュに踊り込む。勝負どころの35キロ過ぎから時折見せた苦しそうな表情は、みるみる笑顔に変わった。

「すごく楽しい42キロでした。うれしい気持ちで走れた。沿道の声援が背中を押してくれました」

これが五輪史上最大の難コースと呼ばれた上り下りが激しいマラソンを制した女性なのか。ケロリとした表情で場内を一周した。

そして記者会見でもあっけらかんと言い放つ。

「金メダル？実感わかりません。それよりも、これで目標を果たし、目指すものがなくなった、終わった、と思うとさびしい気がするんです」

日本陸上界戦後初の輝かしい金メダル。「寂しい」と表現をした日本の金メダリストもまた、初めてだろう。

この一年、引きずってきた影がある。昨夏、スペイン・セビリヤで開かれた世界選手権に出場できなかったことだ。

…結局、小出義雄監督と話し合い、棄権を決めた。

華やかな舞台の前で、主演女優は役を降りた。

心は終着点をなくした。前向きになるには時間がかかった。追い討ちをかけるように…手首を骨折するアクシデント。そして体調不良。(略)

強い選手だ。一年間のもがき。それも結局、スタートラインにたったときの喜びに変えてみせた。

お守りの中に、入れたものがある。小出監督が書いた近著の締め言葉だ。(略)

五輪の金メダルという目標達成で燃え尽きてはいない。「寂しい」といったそばから「明日も変わらず、このまま走り続けたい。楽しい気持ちをもって」。「春には海外のレースにも出たいし、今後はタイムを狙って走ってみたい」といった。

…喜びをかみしめたあと、初の 2 時間 20 分を切るランナーを目指しての挑戦が始まる。⁵⁵

『読売』においても、笑顔とガッツポーズでゴールテープを切る高橋の写真が使われ、署名記事が書かれている。これは、金メダルという結果の裏にある監督と高橋との強い信頼関係を中心とした記事となっている。

マラソン高橋会心の金 陸上日本女子で初 すごく楽しい 42 *₀でした 監督信じ頂点

ゴールテープを切って…すぐにあたりを見回した。…「監督に一番先に会いたくて」。自分を育ててくれた小出義雄監督(61)が、顔をくしゃくしゃにして喜ぶ姿が、真っ先に見たかった。

高橋は、ひたすらに小出監督を信じて走ってきた。

リクルートに入社したての一九九六年。高橋は走り方が全く分からなくなっていた。…腕を小わきに抱え込むような独特なフォームが恥ずかしくて仕方なかった。

当時、監督はマラソン専門。慕って入社したのに、指導はおろか、口をきくことも出来ない。その年の冬、…メンバーにいらしてもらった。そこで聞く監督の言葉は意外だった。「それでいいんだよ。腕を前で振るからリズムが速い。マラソンになったら、世界一になれるぞ」。

“ほめ上手の小出”の異名を取る監督は振り返る。…平凡なランナーは生まれ変わった。(略)

…過酷な練習もあった。「お前が一番練習している」「一番強いんだ」という言葉だけが頼り。…練習を前に「監督、逃げてもいいですか」と言うと、監督はにこにこ笑っていた。あとは何事もなかったように走り出した。(略)

…ジョギングパンツに縫い付けたお守りの中に、監督が最近著した本の切抜きを入れておいた。「…強くなってくれた」。高橋にとってその一文がすでに金メダルの価値があった。(小石川 弘之)

この2つの記事において、かなりの紙面を割いて、署名記事で高橋と小出の物語が伝えられている。この1面の署名記事は、ステージ2において、初めて登場するものだが、『読売』においては、この00年シドニー大会から、毎日、見られる。『朝日』において署名記事が毎日見られるようになるのは、先にソフトボールで見た04年アテネ大会においてである。

なお、両新聞とも「天声人語」、「編集手帳」で高橋について書かれている⁵⁶。また、『読売』は「女子マラソン成績」として、高橋を含む1～3位までの選手と7位15位の山口衛里と市橋有里の記録を表にして載せている。⁵⁷

2004年アテネ大会では、野口みずきが前回大会の高橋に引き続き、金メダルを獲得した。この結果を、両紙とも朝夕刊1面に写真入りで伝えた。使われている写真は、両紙とも朝刊は両手をあげて笑顔でゴールテープを切る瞬間のもので、朝刊は日の丸を広げてウイニングランをしているところである。また、野口に関する記事はどれも署名記事となっている。⁵⁸この大会において、それまでの記事と大きく異なるのは以下の3点である。1つ目は、両紙の朝夕刊全てにおいて、順位と記録を載せた表が登場する点である。2つ目は、『読売』の夕刊において、選手の感情や人間性だけではなく、競技に関する詳細な分析と解説がなされている点である。「<ゴールドプラン>」と呼ばれる野口の行った大会に向けての「長

期計画」の説明に多くの紙面が割かれ、レースの模様についてはマラソンコースの高低図を用いて解説されている⁵⁹。3つ目は、一番注目された選手（この場合は、高橋）以外の選手にもスポットが当てられている点である。5位と7位に入賞した土佐礼子と坂本直子についても、四角抜き顔写真が掲載されている⁶⁰

《野球》

00年シドニー大会において、野球は決勝トーナメントに進出するものの、準決勝でキューバに、3位決定戦で韓国に敗れ、4位という結果に終わっている。この大会からプロの参加が認められており、日本はプロアマ混成チームで大会に挑んだ。プロ野球からは松坂大輔らが参加した。3位決定戦での敗戦を両紙とも「野球、銅メダル逃す」⁶¹「野球、初めてメダル逃す」⁶²と見出しで伝えている以外は、大きな扱いはされていない。

04年アテネ大会は、長嶋茂雄が監督をしたことで注目を集めた⁶³。この大会から日本はチームをプロ野球選手のみで編成した。なお、球団への配慮から、各球団2名ずつという制限が設けられていた。予選リーグにおいて、日本はキューバに初めて勝利する。そのことを両紙は写真入で大きく取り上げている。なお、『読売』は、「鬼気迫る 150^{*}。右腕に打撃直撃 動じぬ怪物」という見出しの署名記事で、この時の先発完投を果たした松坂大輔について、彼がいかに完投にこだわり、それが何を意味したのかについて記述している⁶⁴。

順調に予選リーグを勝ち抜いた日本だったが、準決勝でオーストラリアに敗れ、決勝進出にはいたらなかった。このことを、両紙は敗戦でうなだれる日本チームの写真を用いて、伝えている。

08年北京大会では、星野仙一が監督を務め、チーム編成は、前回大会同様プロのみというものだった。決勝トーナメントまでは、本文で結果のみが伝えられている記事がほとんどであるが、『読売』（夕刊）において1度、見出しで伝えられている。ここでは、野球日本代表のことを「野球」と記述するのではなくて「星野J」と呼んでいる。これは、監督である星野と日本（JAPAN）を組み合わせた「星野JAPAN」という愛称の略語であり、興味深い。

星野J、カナダに1-0

1次リーグの野球は、カナダ戦。日本は5回到稲葉（日本ハム）の本塁打で挙げた1点を3投手の継投で守り切り、3勝目（2敗）をマークした。⁶⁵

準決勝の韓国戦の様子は、8月22日の夕刊において、『朝日』は写真入りで、両紙とも見出しとして、取り扱っている。なお、この試合は時差の関係で発刊に間に合わなかったため、どちらも「野球準決勝 日本先取点」⁶⁶、「野球 日韓 2-27回」⁶⁷と、試合の途中経過を伝えている。この試合、日本は韓国に敗れてしまう。『朝日』では、「野球は、準決勝で日本が韓国に2-6で負け。23日に米国と銅メダルをかけて戦う。」⁶⁸と本文中にあるだけだが、『読売』では大きく取り上げている。なお、ここで使われている写真は選手のものではな

く、監督である星野が敗戦後に「グラウンドを見つめる」というものである。なお、本文の内容は、日本のオリンピックにおける野球の歴史をなぞるものとなっている。

星野 J 決勝逃す

野球は、日本が準決勝で、韓国に 2-6 で逆転負けし、悲願の金メダル獲得を逃した。2 大会連続の銅メダルをかけ、23 日 3 位決定戦で米国と対戦する。野球は次回ロンドン五輪で除外されることが決まっており、1992 年バルセロナ五輪で正式競技となって以降、日本は 96 年アトランタ五輪の銀が最高だった。⁶⁹

なお、日本は 3 位決定戦に敗れてしまう。その結果を各紙は、以下のように伝えた。試合の内容は、スコアのみに止まっている。

野球・シンクロ「銅」に届かず

北京五輪第 16 日は 23 日、野球の 3 位決定戦があり、日本は米国に 4-8 で敗れ、メダル獲得はなかった。日本がメダルを取れなかったのは 00 年シドニー大会の 4 位以来 2 度目。決勝では、韓国がキューバを 3-2 で破り、初の金メダルを獲得した。野球は次回ロンドン大会では、実施されない。⁷⁰

星野 J メダル逃す

北京五輪は 23 日、野球の 3 位決定戦で、日本は米国に 4-8 で逆転して 4 位となり、2 大会ぶりにメダルなしに終わった。決勝でキューバを 3-2 で破った韓国が初の金メダルを獲得した。⁷¹

《柔道・田村（谷）亮子、野村忠宏》

92 年バルセロナ大会、96 年アトランタ大会で銀メダルという結果を残した田村亮子は、00 年シドニー大会においても、大きな注目を集めている。『読売』では、田村の試合の前日の夕刊において、会場入りの写真と共に、前回大会から今回大会に挑むまでの田村の葛藤や「女子スポーツ界の『顔』」としての気丈さという人間性が描かれている⁷²。同日の『読売』においては、野村と共に、見出しで取り上げられているものの、その内容は、試合の告知に止まっている。以下は、その『朝日』の記事である。

柔道、田村・野村ら登場

柔道では、連覇を狙う男子 60 ㎏級の野村忠宏（ミキハウス）、三度目の五輪で初の金メダルを目指す女子 48 ㎏級の田村亮子（トヨタ自動車）が登場する。⁷³

このように注目を集めた田村と野村は、共に金メダルを獲得した。『読売』は、田村の優勝について、金メダルを持って微笑む写真と共に以下のように書いた。

田村 悲願の金 初恋の人とやっと巡り合えた

YAWARA が飛んだ。小さな体が、畳の上で、二度、三度、飛び跳ねた。両手でガッツポーズを作る目には涙。あふれる喜びを抑え切れなかった。アトランタから四年。バルセロナから八年。悲願の金メダルだ。

…見ていると自然にエネルギーがわいてきた。「日本には、私をこんなに応援してくれる人がいたんだ。私は一人じゃない。」準決勝までの苦しい戦い、硬かった気持ちがスーッと消えた。畳の上ではもう百人力。こん身の「内また」が決まったのは、わずか36秒だった。(略)

金メダルへの思いはだれにも負けない。「YAWARA伝説」の始まりである小学校二年生の時の櫛田神社での奉納試合。デビュー戦で五人の男の子を投げ飛ばした。この時、ごほうびにもらったのが大きな金メダルだった。八歳の時に、人生で初めてもらった勲章。二十五歳になった今でも、その味が忘れられない。トレードマークのリボンにはこの日、赤にささやかな願いを込め、金をほどこした。

オリンピックで初めて、笑顔で迎えた表彰式。首につるした金メダルにキスをした。「オリンピックは金メダルまで八年の思いがありました。初恋の人にやっと巡り合えた気持ちです。初恋メダルですね。

少女の夢は、ついにかなった。(井原 敦)⁷⁴

また、『読売』は、「編集手帳」においても田村について書いている。『朝日』は、本人の話を中心にしなが、多くの紙面を割いて、アトランタ大会後からシドニー大会決勝、そして現在の彼女の心境について書いている。なお、写真は決勝戦で一本を決め、ガッツポーズをする田村を写したものが使われている。

田村 悲願の金 この瞬間、夢のよう…初恋の人にやっと会えた ヤワラが語る「金」の道

アトランタ五輪決勝で不覚をとってから四年。悲願達成までの思いを、田村が自らの言葉で振り返った。

◇

三度目の挑戦でようやく手にできた五輪の金メダル。この瞬間を味わうために、頑張ってきました。今は夢のよう。初恋の人にやっと巡りあえたような気持ちです。努力した甲斐があったな、と思います。

今年になって、四年前のアトランタ五輪のビデオを何度も見ました。…その度に思い出す悔しさは、忘れません。

あの夜、柔道競技が全部終わって日本代表選手団の打ち上げパーティーがありました。みんなに「頑張った」と言われた後に、大泣きしてしまいました。最後に、親とごく身近な人たちの前で「四年後、シドニーを目指す」と宣言したんですが、不安もいっぱいのものでした。

帰国後、二ヵ月ほどけいこを休みました。…自問自答の日々が続きました。布団にくるまって泣いたこともあります。

でも、つらい、やめたい、と考えたことはなかった。四年前を振り返ってみると、あの時私は「銀」の器だったのでしょ。

…あえて何もない所にレールを敷く人生っていうのが、希望があると感じるんです。(略)

男の子を豪快に投げ飛ばす女の子を見て、柔道を始めたのが小学二年生。母には「女の子のやるスポーツじゃない」と反対されましたが、人を投げるってことをやってみたかった。(略)

「願い事は」と聞かれると、いつも「五輪の金メダルが欲しい」と答えてきました。それがやっと私の手の中にある。…少し休んだら、おしゃれなキャミソールも着てみたいな。

…みんなが、後押ししてくれました。その大きな力が、「夢」をかなえてくれた気がします。(談)

＝構成・竹園隆浩⁷⁵

2004年アテネ大会においても、野村、谷（結婚により、田村は谷となった）は金メダルを獲得した。野村は3連覇、谷は2連覇という記録である。両紙とも、朝刊に写真入でその結果を伝えている。野村は、頭に月桂樹、胸に金メダルで手を振る写真が、両紙で使われており、谷は試合中及び試合後の写真が使われている。

『読売』の谷の優勝を伝える記事では、怪我からの復帰のことに加えて、結婚を意識した表現がいくつか見られる。

けが 気迫でねじ伏せた「シドニーの何倍もうれしい」

…視線は観客席にいる野球日本代表の夫、佳知（オリックス）を探した。…（略）

谷が試練に見舞われたのは約一か月前。練習中、左足首の腱を痛め、じん帯も二か所、断裂。（略）

それを鋼の意志と日ごろの鍛錬で吹き飛ばした。…その変化は柔道着のサイズに表れた。筋肉が生地を引っ張るから、柔道着のまた下の丈が、三年前と比べて四センチ、昨年九月の世界選手権のころと比べても二センチ長くなった。

「外国人選手は結婚して、子供を産んで三十四、三十五歳までやっていますよね。私がいま、柔道をやめたとしても暇ですし……」。四年後の北京五輪を聞かれると、「じっくりと考えたい」。

ミセス・ヤワラには、その時間がたっぷりある。(向井 太) ⁷⁶

『朝日』では、「谷亮子の話」の中で、「谷亮子としてオリンピックチャンピオンになれて、シドニーの時よりも何倍もうれしいです。…田村亮子でも谷亮子でも世界一になれて最高です。」と、谷が結婚前、結婚後に行われたシドニー大会、アテネ大会で金メダルを獲得したことを、暗に表現しているが、結婚や相手に関する直接的な記述は見られなかった。記事は「鍛錬の厚み『脚が3センチ伸びた』」という見出しで書かれており、トレーニングによって、筋肉が増え、足腰に厚みが出たことが書かれている⁷⁷。これは、谷の個人の歴史であるが、『読売』も同じ内容である。

2008年北京大会、谷は5度目の出場を果たし、銅メダルを獲得する。2005年12月31日に長男を出産しての挑戦だった。この結果を、両紙とも朝刊1面に写真入で伝えているが、『読売』が表彰式でメダルを掲げる谷の写真であるのに対し、『朝日』は準決勝で敗れた谷の写真を使っている。本文はどちらも署名記事となっており、育児（授乳等）をしながらの調整の難しさについてのものが多く、今後の去就についても触れられている。また、『朝日』においては、「夫佳知さん（プロ野球選手）の話」として、谷の夫が妻である谷をたたえる文が載っている。

谷 3連覇逃し銅 5大会連続メダル「全力出した」

メダルの色が違った。

「全力を出した結果ですから、すごくうれしい思いです」。精いっぱい絞り出した言葉。無念の思いがにじむ。(略)

北京まで応援に駆けつけた長男 2 歳 7 ヶ月の佳亮ちゃんに、ママは世界一の報告が出来なかった。

(略) 05 年末に佳亮ちゃんを出産した。妻であり、母である谷は「きちんと主婦をしているから柔道をさせてもらえる」と考える。北京に向けて本格復帰をしたのは昨年春。全日本合宿では、ほかの選手が寝ている間に、眠い目をこすって 3 時間おきに授乳した。練習後にどんなにおなかが減っていても、子どもの離乳食が先だ。睡眠時間を削って育児と柔道に取り組んだ。(略)

…今後のことについては「また主婦がしたい」。冗談を言ったあと、「1 人では決められない」。

金メダルには届かなかったけれど、ママは一生懸命に戦った。…柔道家のママを、佳亮ちゃんは大きくなってきっと誇りに思うだろう。(柴田真宏) 78

谷 ママで「銅」 V3 は逃す 日本初メダル

…準決勝でまさかの敗戦。…

2005 年のおおみそかに長男を出産した。「子供を産んでもまだ柔道ができるというところを見せたい」と、谷は、子育てが一段落してから本格的に畳の上に帰ってきた。

だが、微妙に何かが違う。

…実績を買われて、世界選手権代表にも選ばれたが、まだ長男への授乳も終えていない中での試合で、自らへの限界も感じたのだろう。関係者にボツリと漏らしたことがあった。

「ああ終わったと思ったのに、選ばれちゃった。私はいつまでやったらいいんですかね」(略)

だが、周囲は、谷に「YAWARA」を演じ続けることを求め続けた。子育てと並行しながらの競技生活はつらいが、止まることはできない。…表向きは「調子は本当にいいです」と話していても、裏で「1 日何時間あっても足りない」とこぼすこともあった。

…予想外の敗戦を喫したアトランタの悪夢が繰り返された。勝負事に「絶対」はない。大本命と言われた谷に対しても、それは同じだった。(上村邦之) 79

2004 年アテネ大会、北島康介は日本競泳史上初となる 2 冠を達成した。両紙は 100m200m どちらの結果も、朝夕刊の 1 面、写真入の署名記事で伝えている。

まず、1 冠目となる 100m 平泳ぎの結果については、朝刊には決勝のレース直後の写真を、夕刊には表彰式の写真を使用して、伝えている。なお、本文の内容はコーチである平井伯昌に関するものが多い。

北島 100 平金メダル ハンセンを後半逆転

…後半、猛烈に追い上げ、1 分 0 秒 08 でゴール。金メダルを獲得した。(略)

昨秋、練習を再開すると、平井伯昌コーチはこう話した。「ウエートトレーニングで力をつけることから始める。…バージョンアップでは勝てない。新製品を送り出すつもりでいく」。(略) (堀井正明) 80

北島 悲願の金 宿敵ハンセン破る

…試合前になるととたんに鋭さを増す目に、平井伯昌コーチは、ひと目でほれ込んだ。「この子を五輪選手に育てよう」。(略)

…「悔しかった。アテネで金メダルを取りたいと思った」。北島の目が本気だった。「平井コーチは僕の泳ぎだけでなく、心まで読んでいます。すべてを任せたい」。二人の信頼関係はより強固となり、八年前の直感は、メダル取りの確信へと変わった。

…平泳ぎ予選前日の晩、平井コーチは「自信を持てる泳ぎをしろ」と話した。北島は黙ったまま、にらみつけるような視線を返した。「思うところがあるんだな」。スイッチが入った北島の心を読み解くのに言葉は要らなかった。(略)(岡田卓史)⁸¹

北島 笑って泣いた 100 平で金「ちょー気持ちいい」…その直後 コーチ「初めて見た」

「ちょー気持ちいい」と、テレビ向けの金メダル第一声を言い終えて 40 秒後。北島康介(21)の目から涙がぼろぼろこぼれた。何かが胸を突き上げた。

「ありが……とう……ございます」。言葉がとぎれる。テレビの取材の時とは別人のよう。…

…14 歳と 2 か月の時から北島を指導してきた平井伯昌コーチ(41)も、泣く姿を見たことがない。(略)

…平井コーチは、男泣きを見てつぶやいた。「アテネで金を取ると公言して 2 人でやってきた。練習は本当につらかったから」(略)

…北島は会場の隅でまたひとしきり泣いた。取材カメラがいない場所だった。(山中季広)⁸²

北島 夢の金「支えてくれた人に感謝」

…レース後、チームスタッフと抱き合って泣いた。「夢の舞台で金メダル取れた。支えてくれた人に感謝したい」。二人三脚で歩んできた平井伯昌コーチ(41)を見つけると、また、涙があふれた。(略)

「まずいかなと思ったこともあった。でも、自分と平井コーチを信じてやってきた」と北島。固い絆で結ばれた二人が、最後に勝った。(岡田卓史)⁸³

2 冠目となる 200m 平泳ぎの結果についても、2 紙は朝夕刊において、写真入で大きく取り上げている。朝日新聞は、朝刊においてレース直後の北島の写真を用い、夕刊では表彰式のものを使い、この記事にはコーチである平井の写真も載っている。内容は、100m の優勝時と同様、平井を中心としたものとなっている。

200 平は五輪新

日本人で初の五輪競泳個人種目 2 冠を達成した北島。…平井伯昌コーチ(41)との二人三脚で世界の頂点を極めた。

…コーチはこう話した。「…康介が水泳に集中していった。高校生のような純粋な顔つきになった」

中学 2 年生から指導を始めた。いつも「ちょっと無理め」の目標を与え、少しずつ背伸びさせることで、挑戦者の気持ちを育てた。

中学 3 年生の全国大会に優勝した後は「五輪に出たいか？出るにはどんな練習にも耐える覚悟が必要だ」。目標は 3 年後のシドニーで実現させた。

「無理な目標は意味がない。頑張れば達成できる目標を与えることがコーチの仕事」と平井コーチはいう。(堀井正明) 84

「いつも前向き」コーチも一役 取材受けさせ「その気」に

(略) 平井伯昌コーチは「大きな大会になると信じられないような集中力を発揮する」という。こうした信頼も、おそらく北島の性格に負うところが大きい。(略)

…「記事にしなくてもいいから、インタビューしてほしい」と依頼を受けた時、二つ返事で引きうけた。

「取材を受けるだけで選手はモチベーションが上がるんです」。こうしたコーチの思惑も、興味深かった。

…平井コーチは「人に好かれる選手でいろ」とも繰り返す。

…性格は結局コーチや周囲によってつくられた部分も少なくないように思う。(略) (堀井正明) 85

『読売』は、朝夕刊どちらも、レース直後の写真を使い、内容は3位のハンセンに関するものが多い。

200 平 ライバル圧倒 オレがナンバーワン

(略) 二百メートル平泳ぎの覇者を巡るレースは、プールに飛び込む前から国同士の駆け引きに発展していた。

十五日の二百メートル決勝は、北島康介が世界記録保持者のブレンダン・ハンセン(23)を0秒17抑えた。テキサス大学のチームメイトで、二百メートル背泳ぎ優勝のアーロン・ピアソル(21)が、自国メディアに向かってまくし立てた。

「北島はスタート直後に違法なドルフィンキックを打っている」

同夜の記者会見で、米国報道陣が泳法違反の質問をぶつけた。…

平井伯昌コーチが言う。「…今回も作戦だと思った」(略)

まず二百メートルで北島が勝ち、競泳陣が沸き立った。その結束力が今度は、北島に降りかかった心理戦を打ち破いた。日本チームは最高の状態にある。(岡田卓史) 86

ハンセンは選考会重視 調整失敗

…昨年の世界選手権に続く二種目制覇は「北島時代」の到来を予感させた。

ブレンダン・ハンセン(23)とのライバル対決は、プールに飛び込む前に、決着がついていたのかもしれない。

ハンセンは、明らかに精彩を欠いていた。…二百メートル決勝でも、結局、1秒83もタイムを落とした。

北島との勝負が二戦二敗に終わったハンセンは「キックが利かなくなっていた。準決勝の時点で2分9秒台が出せないことは分かっていた。その状態で決勝を泳ぐのは辛かった」と、うなだれた。

ハンセンは四年前の米国代表選考会で、二種目とも小差で五輪出場権を逃している。「…選考会のための調整をしてしまった」とハンセン。選考会を四か月前に終えていた北島が、五輪への準備期間を十分に使えたのとは対照的だった。

「ハンセンが出した世界記録は素晴らしいタイム。…」戦いが終わって、北島は素直に打ち明けた名勝負になるはずだった対決は、1秒43もの大差がついて終わった（岡田卓史）⁸⁷

なお、100m、200mどちらの結果も、1～3位までのタイムを載せた1覧表付きで伝えられている。

2008年北京大会においても、北島は100m、200mにおいて2冠を達成する。100mは世界新での優勝であり、この結果を伝える記事は、朝日新聞では夕刊朝刊で、読売新聞では夕刊で見られ、全て写真入である。朝日新聞、読売新聞共に夕刊で使用している写真は、優勝を決めた瞬間、プールの中でガッツポーズをする北島であり、酷似している。なお、両紙とも夕刊において、コーチである平井に関する記事が載っている。

「頼りにしていた平井伯昌コーチは、8月の国際大会の直前合宿のため、チームメートを連れて先に出国した」「平井コーチとの歩みも挫折から始まった」「少年時代に平井コーチから授かった教えも守っている」⁸⁸

「その目は、指導する平井伯昌コーチに、初めて会った小学校1、2年生のころの北島を思い出させた。…平井コーチは選手の将来性を測るのに、何よりも目力を見る。」⁸⁹

200mの優勝は、両紙とも、夕刊朝刊の写真入りの記事で伝えている。これらの本文は全て署名記事となっている。また、『朝日』においては、08年北京大会においても、コーチである平井の写真を紙面に掲載している⁹⁰。以下に見るように、8月14日『朝日』の夕刊、15日の『朝日』、『読売』、両紙の朝刊において、この平井に関する話が登場する。また、高速水着として話題となった「レーザーレーサー」についても記述が見られる。なお、200mバタフライの松田丈志に関しても、水着に関する記述が見られ⁹¹、当時の注目を読み取ることができる。

師の一言 戻った集中力

（略）「金メダルを取ろう」

北島は、東京スイミングセンターで中学2年から平井伯昌コーチと誓い合った。（略）

…シドニー後に芽生え始めたプロ選手になる夢を、2人で実現した。

世界新を出す前から、平井は周囲に話していた。

「北京五輪でも2冠を取る」

北島は来るべきアテネ五輪に集中していた。だが、周囲から平井の思いは聞いていた。2五輪連続2冠は、まだ金メダルを手にする前からの師弟の夢だった。（略）

北島は、「平井コーチとの二人三脚」とは言わない。トレーナーら、多くのスタッフにも感謝の思いがある。

それでも平井コーチへの思いは特別だ。「コーチというより、先生。2人がかけてきた年月は長い。平井先生と一緒に、この五輪を集大成の場としてやってきた」

2人のストーリーを完結させた。(由利英明) ⁹²

世界新に0秒13差「ちょっと悔しい…」

日本中が、高速水着「レーザーレーサー」の話題で持ちきりだったころのこと。北島は「おれらは4年に1回の、1分間のために練習している。裸一つで勝負しに行く時、『水着で勝った、負けた』って言われたら、たまったもんじゃない」と怒りの思いを打ち明けてくれた。 ⁹³

世界一大きな泳ぎ 2冠北島「大満足」

世界一大きな泳ぎで、ストリームライン（流線形）の泳速が速いスピード社製水着レーザー・レーサーの特性を生かした。(略) 平井伯昌コーチは言う。「康介は努力してくれた」(略) 平井コーチは「200mを全力で泳ぐのが最後と思うと寂しかった」 ⁹⁴

「終わったという感じ」北島 2冠 引退示唆

北島を長く指導してきた平井伯昌コーチもレースの後、報道陣に囲まれた際に涙をこぼして「康介が全力で200mを泳ぐのは最後かな？と思って見ていた」と発言。「皆さんの期待が今までと同じなら、続けるのは厳しい。僕から『やれ』とは言えない」と語った。(略) 中学生の時から12年間、北島を指導してきた平井伯昌コーチに「ありがとうございました」と一礼した。 ⁹⁵

(2) 数量的変化

ここまで新聞1面における内容的な変化を見てきた。つづいて、1面の数量的な変化を見る。以下の表1、表2は、『読売』及び『朝日』（東京版）の1面に掲載された選手の競技に関する写真⁹⁶について、筆者が集計を行い、それらをまとめたものである。使用した新聞記事は、データベース（ヨミダス歴史館、聞蔵Ⅱ）または新聞の縮刷版をもとにしている。

7つの大会期間中の新聞の1面を比較して、一番顕著な特徴は情報量の増加だろう。84年ロサンゼルス大会時は、1面の隅に1つの写真と簡単な結果の羅列が書かれた8分の1程度だったオリンピックに関する記事が、08年北京大会では日によっては、ほぼ1面とも言えるほどの紙面を占めるようになっている。また、この増加は日本人選手を扱った記事の増加によるところが大きいだろう。

84年ロサンゼルス大会以降、大会期間中⁹⁷の『読売』及び『朝日』朝夕刊1面において、オリンピックに関する記事は、両紙とも92年の1回を除いて必ず存在する。これらの記事とんどの場合、写真付きで掲載されている。以下の表およびグラフに、大会期間中の選手の写真に占める日本人選手の割合を表した。なお、開催地の時差により、紙面の内容は大会ごとに異なる。そのため、朝夕刊の平均を出し、容易に比較できるようにした。

表 2 『朝日』、『読売』1面の選手の写真における日本人選手の割合

	朝日新聞							読売新聞						
	朝刊			夕刊			平均	朝刊			夕刊			平均
	選手の 写真数	日本人選手の 写真数・割合		選手の 写真数	日本人選手の 写真数・割合			選手の 写真数	日本人選手の 写真数・割合		選手の 写真数	日本人選手の 写真数・割合		
1984	14	9	64%	12	8	67%	65%	15	7	47%	15	9	60%	53%
1988	18	8	44%	10	8	80%	62%	16	13	81%	10	9	90%	86%
1992	12	10	83%	12	8	67%	75%	15	12	80%	13	11	85%	82%
1996	15	9	60%	15	12	80%	70%	18	15	83%	21	17	81%	82%
2000	16	13	81%	11	8	73%	77%	17	15	88%	18	11	61%	75%
2004	39	38	97%	21	16	76%	87%	32	30	94%	41	37	90%	92%
2008	25	22	88%	16	13	81%	85%	29	27	93%	13	10	77%	85%

(資料より、落合作成)

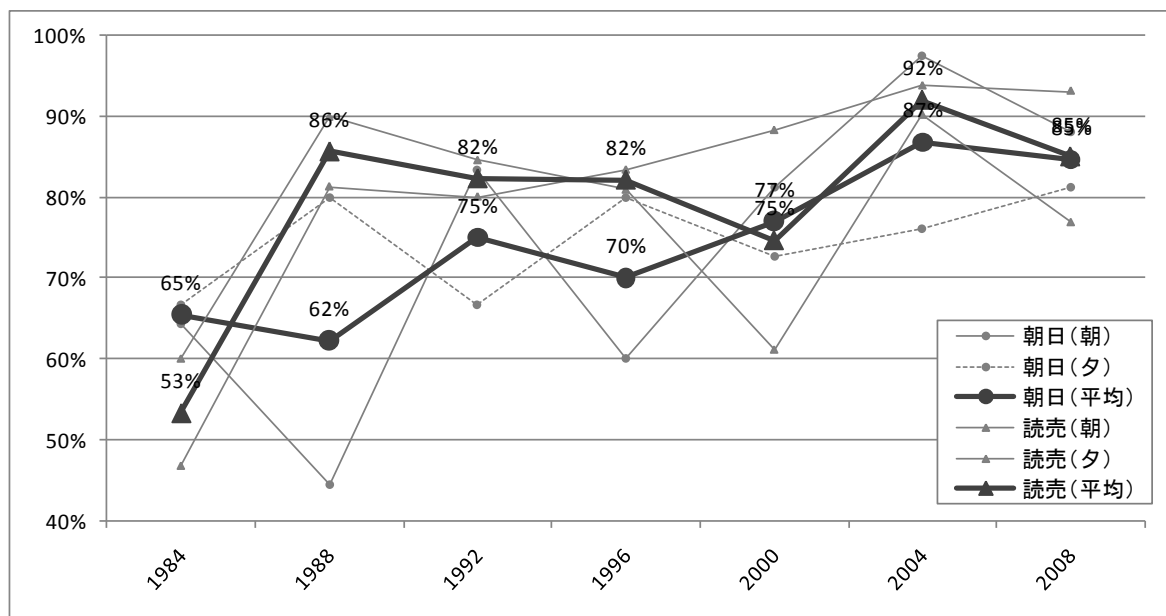


図 2 『朝日』『読売』1面の選手の写真における日本人選手の割合の推移

(資料より、落合作成)

これによると、『読売』においては、1984年から88年にかけて大きな増加が見られ、『朝日』においては、88年から92年において大きな増加が見られる。その後、96年まで大きな変化は見られないが、『朝日』では96年から2004年にかけて徐々に増えている。『読売』では、2000年において一度減少しているものの、2000年から2004年で大きく増加している。

なお、先に「(1) 内容的変化」で指摘した署名記事の登場は、『朝日』では、1996年のことであり、毎日登場するようになるのは2004年のことである。『読売』では、2000年に初めて登場し、それ以降毎日紙面を飾っている。このため、この日本人選手の写真数の割合との内容的変化の相関は見られないと言えることができる。

それぞれの日本人選手の写真の数は、朝夕刊の合計数で、『朝日』は17、16、18、21、21、59、35、『読売』は16、22、23、32、26、67、37である。両紙とも04年において、

急増している。これは、以下の図見るように、日本人のメダル獲得数が多かったためと考えられる。

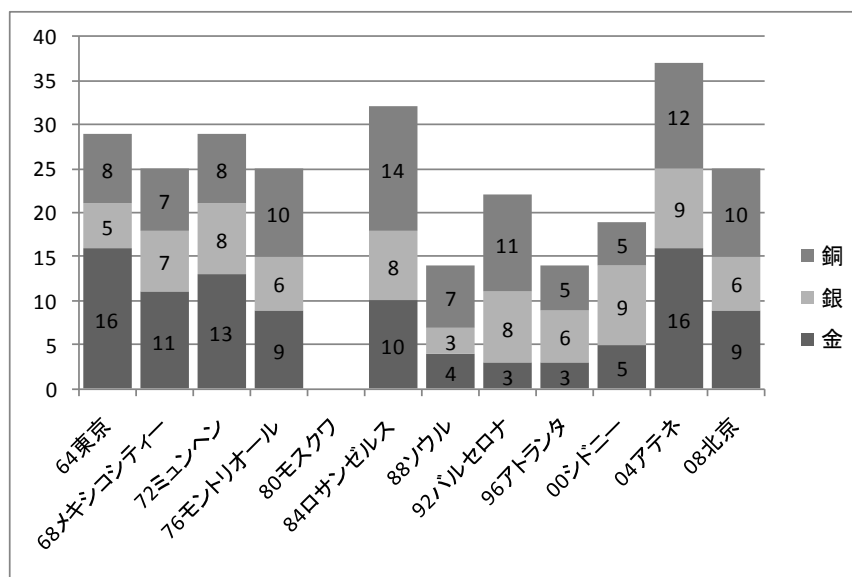


図 3 日本のメダル獲得数（資料⁹⁸より、落合作成）

「（１）内容的変化」においては、バレーボール女子が実力の低下とともに、注目もされなくなる様子を見たが、ここでは、逆に結果を残した競技が人気とは関係なく、注目を集める様子を見ることができる。なお、ここで詳しく触れられることはないが、そうした大会前に注目を集めていなかった選手は、メダルを獲得した際、四角抜きや丸抜きの顔写真で、紙面において紹介されることが多い。

ただし、ここで注意しなければならないのが、全ての外国人選手に目が向かなくなったわけではないということと、紙面におけるオリンピック関連記事の増加は日本人選手を扱ったものだけによるわけではないということ、である。

たとえば、セルゲイ・ブブカは男子棒高跳びの世界記録保持者であり、92年バルセロナ大会でも大会前から注目を集めていた。予選後の朝刊には、両紙とも写真付きで予選の通過を知らせている。しかし、ブブカは決勝で1度もバーを越すことができずに、記録なしという結果に終わるが、それについては、『朝日』は写真付きで、『読売』は本文のみで伝えている。

棒高跳びでは、優勝確実と見られていた旧ソ連合同チーム（EUN）のセルゲイ・ブブカが記録なしに終わる大波乱。6月11の世界記録を持つブブカは5月70に二度失敗した後、5月75に上げた三度目の跳躍にも失敗した。優勝はEUNのマクシム・タラソフで5月80だった。⁹⁹

同様のことは08年北京大会の中国代表の劉翔にも言える。彼は、110mハードルの選手として、開催地中国の期待の星として、大きな注目を集めた。彼はスタートラインに建つ

もののレースを棄権してしまう。このことを『朝日』写真入りの紙面で伝えた。¹⁰⁰ここま
で、日本人選手が敗戦した際に注目して、その描かれ方を見てきたが、負けて紙面に載る
のは日本人選手のときだけに見られる現象ではないのである。

ブブカや劉翔に見るように、全ての外国人選手に目が向かないわけではなく、近年のボ
ルトなど、大きな注目を集める外国人選手も存在する。また、それは世界記録の更新や連
覇、○冠を達成した選手であることが多い。

2. テレビ

1) オリンピックタレント

ここでは、第Ⅱ章において今福や西谷が指摘していた「タレント応援団」に注目したい。
本研究では、オリンピックにおいて、登場するこうしたタレントたちを「オリンピックタ
レント」と呼ぶことにする。その定義としては、実況や解説以外の形でオリンピック放送
に関わる人、である。オリンピックタレントには、今福の指摘したようなジャニーズのよ
うないわゆるアイドルはもちろん、引退した元選手も含まれる。なお、元選手が解説やレ
ポーターとして、自身の行っていた競技にかかわる場合は、オリンピックタレントではな
い。

資料をもとに7つの大会におけるオリンピックタレントを、表2にまとめた。なお、本
項で使用了資料は、雑誌『ザテレビジョン』¹⁰¹と各局公式ウェブサイト¹⁰²である。

表 3 オリンピックタレント一覧（元スポーツ選手に＊印）

88年 ソウル大会	
日本テレビ	長嶋茂雄*（現地レポーター）
92年 バルセロナ大会	
日本テレビ	長嶋茂雄*（現地キャスター）、宮沢りえ（ゲスト）、長崎宏子（東京のスタジオ）
TBSテレビ	伊藤みどり*（現地キャスター）
フジテレビ	山田邦子（東京のスタジオの総合司会）、三屋裕子*・伊藤みどり*（現地レポーター）
96年 アトランタ大会	
テレビ朝日	益子直美*、石田ひかり、加藤久*
	赤坂泰彦・西田ひかる（メインキャスター）
フジテレビ	池谷幸雄・陣内貴美子*・八木沼純子*（現地レポーター） TOKIO（ピクサイトに観客を集めて衛星中継＋ライブ）
TBSテレビ	鈴木杏樹、荻原健司*・次晴*（ゲスト）、小谷実可子*・伊藤みどり*（レポーター）、新藤晶子
日本テレビ	江川卓*、森末慎二*、川合俊一*、増子明美*
00年 アテネ大会	
日本テレビ	明石家さんま（司会）
TBSテレビ	モーニング娘。
フジテレビ	広末涼子
テレビ朝日	福山雅治
TBSテレビ	小谷実可子*
04年 シドニー大会	
日本テレビ	明石家さんま・長嶋一茂*（キャスター）
TBSテレビ	中居正広・久保純子（メインキャスター）
フジテレビ	藤原紀香・小倉智明（現地キャスター）
テレビ朝日	松岡修造*（メインキャスター）、南原清隆（特別記者）、栗山秀樹*・福田正博*（現地）
テレビ東京	別所哲也（スタジオキャスター）、青島健太（現地キャスター）
08年 北京大会	
日本テレビ	明石家さんま（スペシャルキャスター）、櫻井翔（メインキャスター）、浅尾美和*（コメンテーター）、 中畑清*（コメンテーター）、山本博*（コメンテーター）、城障二*（コメンテーター）
フジテレビ	浜田雅功（スペシャルキャプテン）、古田敦也*・相武紗希（スペシャルキャスター）
TBSテレビ	中居正広
テレビ朝日	福山雅弘、松岡修造*（メインキャスター）
テレビ東京	草野仁（メインキャスター）、荒川静香*（メインキャスター）

（資料より、落合作成）

オリンピックタレントが最初に確認できるのは、88年ソウル大会である。元読売巨人軍の長嶋茂雄が日本テレビにおいて、登場する。当時、長嶋に求められた役割は、あいまいなものであったことがうかがえる。

表から明らかなように、オリンピックタレントは、92年バルセロナ大会以降、増加の傾向にある。また、92年バルセロナ大会 96年アトランタ大会では、野球の長嶋、王貞治、江川卓をはじめ、水泳の鈴木大地やバレーボールの三屋裕子、益子直美、川合俊一、バドミントンの陣内貴美子、シンクロナイズドスイミングの小谷実可子、マラソンの益子明美、サッカーの加藤久、体操の森末慎二、池谷幸雄、フィギアスケートの伊藤みどり、八木沼純子、ノルディック複合の荻原健司、次晴といった元選手の起用が目立つ。オリンピックタレントの中には、冬季競技の選手も含まれており、競技の専門家という立場からのコメントを期待されていたわけではないのだろう。

また、元選手の起用は00年アテネ大会以降、減少し、変わりにお笑い芸人の明石家さんまや浜田雅功が台頭するようになった。明石家さんまや浜田雅功は、以後複数大会にわたって、スタジオでの司会進行や選手へのインタビュー役を務め、時には、会場に足を運んで競技を観戦するようになる。2004年TBSテレビの「メインキャスター」を務めた中居正広は雑誌のインタビューにおいて以下のように、述べている。

「最初に話をいただいたときは、ただもう長嶋ジャパンとかを見れるって思いだけで、やるやるっ！みたいな(笑)。今、久しぶりに生徒になった気分で、各競技の歴史やルールをスタッフの方々と勉強しているところです。…へえ～そうなんだって改めて思われるところが多々あって。知れば知るほど興味がわいてきて、楽しみで仕方ないですね」…

気分的には、視聴者と一体となって選手団を応援したいという。

「好きとは言え、スポーツに関しては素人なので、アナウンサー的にきっちり伝えていく感じではないと思います。僕にこういうお話が来たということは、それはたぶん求められてないだろうから(笑)、カジュアルな目線で見て、カジュアルな表現ができればいいかなと。もちろん、現地でしか味わえない感覚みたいなものは表現したいから、できる限りのことは伝えられるよう頑張りますよ！」

この夏、最強の応援団長になってくれることは間違いなさそうだ。¹⁰³

この中居の言葉に象徴されるように、オリンピックタレントは「視聴者と一体となって選手を応援」するための存在であり、競技を伝えるための存在ではないのである。

そうしたオリンピックタレントの役割を、2008 年を例に、確認していく。なお、以下にあげたのは、各局公式ウェブサイトによるオリンピックタレントの紹介からの抜粋である。

まず、日本テレビにおいてスペシャルキャスターに起用された明石屋さんまの紹介から見ていく。

スペシャルキャスター：明石屋さんま

日本テレビ系・オリンピック番組の顔であり、この世界最大のスポーツの祭典を、

2 度経験した“五輪マスター”明石屋さんまさんとともに、3 度目のオリンピックを放送します。

オリンピックの出演者として、この人に代わる人を探すことは不可能！

スポーツ大好きでアスリートを尊敬する目線を持ちながら、巧みなトークで選手と接し、本音を引き出すことが出来る唯一の人です。

また、星野監督との友情は有名で、間違いなく他には無い情報やストーリーをお伝えすることが出来ます。

ここで、明石屋に求められているのは、アスリートの「本音を引き出すこと」であり、「他にはない情報やストーリー」を伝えるために、起用されている。

メインキャスターには、同局の報道番組の顔でもあるジャニーズタレントの櫻井が抜擢されたが、その弁には、「客観報道」の姿勢は全くなく、自身も「おもいつき主観を持って」と公言し、「応援」する立場で放送に携わることを局側も「目指していただ」くとしている。

メインキャスター：櫻井翔

(略) 自らの足で動き、自らの目で見て、感じて、1 人でも多くのアスリート取材して行きます。

おもいつき主観を持って、選手を応援し、賞賛し、時には一緒に笑い、泣く。

アスリートたちの北京での闘いを本気で応援できるメインキャスターを目指していただきます。

また、コメンテーターの浅尾美和は、自身がオリンピックへの出場経験を持たないビーチバレー選手であった。浅尾は競技生活と並行してタレント業も行っており、北京大会に選手として出場することを目指すも、夢破れたアスリートの一人である。

コメンテーター：浅尾美和選手

浅尾美和選手からのコメント

「私の目標であるオリンピックを生で見るのは初めてなので、今からすごく楽しみです！

今回はプレイヤーとしてではなく、伝える立場になるわけですが、

自分の目で見たものをそのまま皆さんに伝えられたらと思っています。

一番見たいのはビーチバレーですが、他にも多くの競技を目の前で見て、色々な選手から刺激を受け、私自身のロンドンオリンピック出場への思いを強くしていきたいです。」

浅尾はアスリートではあるが、オリンピックに出場している選手とアスリートとして対等な立場にあるわけではない。よって、彼女の起用はアスリートの目線で見たオリンピックを伝えるというよりも、オリンピックに憧れる視聴者と同じ目線、立場での役割が求められてのものだったのではないだろうか。また、アスリートと視聴者の正に間の存在として、「物語」を提供することが期待されたのかもしれない。

テレビ朝日は、松岡修三をメインキャスターに置き、「4年に一度のスポーツの最大の祭典を、どこよりも熱く」伝えるとした。JOC から「応援団長に任命された」松岡は、「今回のオリンピックは“応援”がキーワード」と語っている。ここにも、日本テレビと櫻井の間に見られた、局と出演者における「応援」という彼らの役割の認識の一致を見ることができる。

【メインキャスター 松岡修造】

僕にとって、北京五輪がアテネ大会と一番違うのは、僕が日本オリンピック委員会（JOC）から日本代表の応援団長に任命されたこと。これは僕にとって本当に嬉しいことなのです。会場で選手を本気で応援するとともに、感じたことをどれだけ視聴者の皆さんに伝えられるかが僕の使命だと思っています。（略）眠らなくなっていていい！今回のオリンピックは“応援”がキーワードです。

テレビ東京は、直近の冬のオリンピックである 2006 年トリノ冬季大会の金メダリストである荒川静香をメインキャスターとして起用した。しかし、ここでも荒川はオリンピック、それもメダリストというアスリートの立場ではなく、「みなさんと一緒にオリンピックを応援してい」く立場を表明している。

荒川静香

（前略）夏の競技に関しましては素人的なところもありまして、至らないところもあるかと思いますが、みなさんと一緒にオリンピックを応援していきたいと思います。

どうぞよろしくお願い致します。

フジテレビは、2006年トリノ冬季大会に引き続き、「スペシャルキャプテン」として、浜田雅功を起用した。同局のスポーツバラエティ番組を務め、選手とも親交のある浜田の起用だが、そこにも競技における専門性は求められておらず、「専門的なことは知りません」と、浜田は公言すらしている。しかし、「応援を一生懸命やろうと思っています」と述べており、浜田の果たすべき役割も選手の応援をすることであることがうかがえる。

(フジテレビ)

スペシャルキャプテン 浜田雅功

「スペシャルキャプテンと言っておりますが、トリノの時と一緒に強引に社長室に連れて行かれて「またお前がやれ!!」と(コウ)ちゃん(豊田フジテレビジョン代表取締役社長)に言われたんです。僕はキャプテンですけど、専門的なことは知りませんし知ったかぶりはできないので、テレビを見ている人と一緒になって応援を一生懸命やろうと思ってます。(略)

また、「スペシャルキャスター」として、古田敦也と相武紗季が起用されている。

スペシャルキャスター 古田敦也・相武紗季

北京五輪中継の顔として、「明るく」、「さわやかに」、「フレッシュに」オリンピックを盛り上げます!

<古田敦也コメント>

「前回の会見の時は緊張していましたが、今は日本応援モードです。全力で応援していきたいです!」

<相武紗季コメント>

「キャスターは初めてなのでわからないこと、至らないことがたくさんあると思いますが、同世代の方たちにもわかりやすく感動を伝えていきたいと思っています」

古田敦也は、元プロ野球選手で、プロ野球の監督経験もあり、球界きっての頭脳の持ち主というイメージのある元アスリートであるが、彼も「全力で応援」することを公言している。相武は、「感動」をしかも「わかりやすく」伝えたいと語った。

こうしたオリンピックタレントを起用した演出に対して、『日本民間放送年鑑』は96年アトランタ大会を指して、「受けのTBSスタジオにタレントが並ぶ光景に人はあぜんとした」¹⁰⁴と記しており、当初から批判もあったことがうかがえる。しかし、そうした批判は、08年北京大会時のオリンピックタレントの起用と、彼、彼女の発言を見る限り、ほとんど反映されていないと言っても過言ではないだろう。

オリンピックに関するテレビ番組におけるこうした状況は、1988年ソウル大会時と比べると、隔世の感と呼べるほどの変化と言えるのではないだろうか。すでにこのときも、先に指摘したように日本テレビにおいて、現役を引退した長嶋茂雄がオリンピック番組に起用されているし、NHK総合の現地「メインキャスター」を務めた野中ともよの例のように、フリーアナウンサーが起用される場合があった。しかし、以下に見るように、2人には視聴者とは違う立場、いわばプロとしてオリンピックを伝えようという意志を感じることができる。

長嶋は、オリンピックを伝えるにあたっての意気込みを「カールやベンをはじめ、もちろん日本選手も取材してきたんで、自分なりの見方で何かを伝えたい」と述べている。ここで言われる「自分なりの見方」とは、読売巨人軍で活躍した「長嶋茂雄の見方」であり、テレビを見ている誰かと同じ目線などという意味では決してないだろう。このインタビューが掲載されたのは、「チョーさんはソウル五輪の“応援団長”だ！」という見出しをつけられた雑誌の誌面ではあるが、「今なお、その存在がまぶしいスーパースターでありつづける…長嶋茂雄」、「永遠のスーパースター」と小見出しにおいて、長嶋のことを絶賛し、その「熱〜い心に誰もが魅せられる」としている。また、紙面には長嶋が身振りを交えて話をしている写真に以下のような、説明が加えられている。¹⁰⁵

世界各地に飛び、スター選手を取材。また独自に徹底的に情報を集めているだけに、収録の合間もアクションまじりで熱っぽい長嶋節が…¹⁰⁶

長嶋は現役選手であったころから、その言動が人とは違うことで知られていた。そのため、これらの番組において、的確にスポーツを伝えることができていたかは、定かではない。しかし、先の08年北京大会で起用されたオリンピックタレントに見られた「専門的なことはわからないが（わからないからこそ）、とにかく一生懸命応援する」といった姿勢を、彼から感じることはできない。

野中はNHK総合の「イブニングソウルアワー」（6:00台）と「オリンピックハイライト」（21:30～23:35）を担当した。『朝日』はこのことについて、「スポーツイベントの頂点である五輪の『番組の顔』に、局外のフリーが起用されるのはNHKでは初めてだ。…NHKはメンツよりも、実力と人気を重くみた、といえるだろう」¹⁰⁷と述べており、NHKのオリンピック放送において、視聴者を意識したキャスターの起用が行われたことがうかがえる。一方で、野中自身は「金メダルがいくつとか、『ガンバレ、ニッポン』式の伝え方をするつもりは全然ありません」と述べている。

また、88年ソウル大会で解説を担当した4人の元選手の大会前の抱負は、それぞれ以下のようなものだった。

山下泰裕・解説 「素人の立場でわかりやすく話したい」とロスの元王者

大古誠司・解説 「男子バレーは未来の金につながる闘いを」とゲキ!!

衣笠祥雄・解説(TBS) 「外国と日本選手の“基礎体力の差”に注目している」

森末慎二・解説(フジ) 「見たものを素直に、同時に専門的にも伝えたい」¹⁰⁸

88年ソウル大会から20年、これらと2008年北京大会のオリンピックタレントたちとの抱負を比較すると、その差は歴然としたものだろう。

04年の中居そして、08年の各局のオリンピックタレントにおいて、もともと共通する点は、「応援」という点である。他にも、競技については素人であるとしながらも、裏話的な話を伝えたいとしている点が興味深い。これらは、今福の指摘するスポーツの場面に

おけるテレビの一種の演出である。同時に、新聞一面の特徴との共通点も見出すことができるのではないだろうか。競技に対する評価をくだすのではなく、選手個人を対象として、「応援」しようとする姿勢、競技以外の部分の「エピソード」を伝えようとする姿勢、これらは、新聞1面に見られた個人の歴史を伝えようとする態度と、同様もしくはきわめて似たものだと言うことができる。他にも、複数回にわたって登場するオリンピックタレントは、否が応でも以前の大会と関連付けられるものであり、オリンピックという歴史の枠組みがテレビにおいても、見られるのではないだろうか。

2) 現在のテレビの仕組み

(1) 放映権料と放映権獲得機関、視聴率

オリンピックの放映権料は以下の図3に見るように、高騰の一途をたどっている。そうした放映権料は「放送局に体力勝負を迫るところまで高騰してしまった」¹⁰⁹とすら、言われている。

日本における放映権は1960年ローマ大会以降、1972年ミュンヘン大会までNHKが単独で獲得していたが、1976年モントリオール大会では、ジャパン・プール（以下「JP」と略す）方式と呼ばれる民放とNHKが共同出資の方法がとられた。1980年モスクワ大会では、テレビ朝日¹¹⁰が単独で、放映権を獲得したが、その後、84年ロサンゼルス大会からは、「個々で交渉したのでは、テレビマナーの高騰を招くだけ」との判断から、JPの方式がとられている¹¹¹。なお、00年シドニー大会から、JPはジャパン・コンソーシアム（以下「JC」と略す）に名称を変更している。

こうした放映権料の高騰をうけて、放送局が少しでも高視聴率を得たいと考えるのは当然の結果であるだろう。しかし、放送する競技の映像は国際映像であるため、そこに大きな演出を加えることはできない。そのため、各局は独自のオリンピックタレントを起用することで、他局との「差別化」をはかった。¹¹²また、当然のことながら、スポーツはやってみるまで結果のわからないコンテンツである。オリンピックタレントの起用は、スポーツというコンテンツにおける、ある種の保険とも言うことができるかもしれない。

このオリンピックタレントを起用するという演出が行われるときに想定される視聴者は、競技へのリテラシーの低い人であると考えられる。そのため、「応援」や「感動の物語」といった、個々の競技を知らなくても共有できる演出が多く用いられているのだろう。

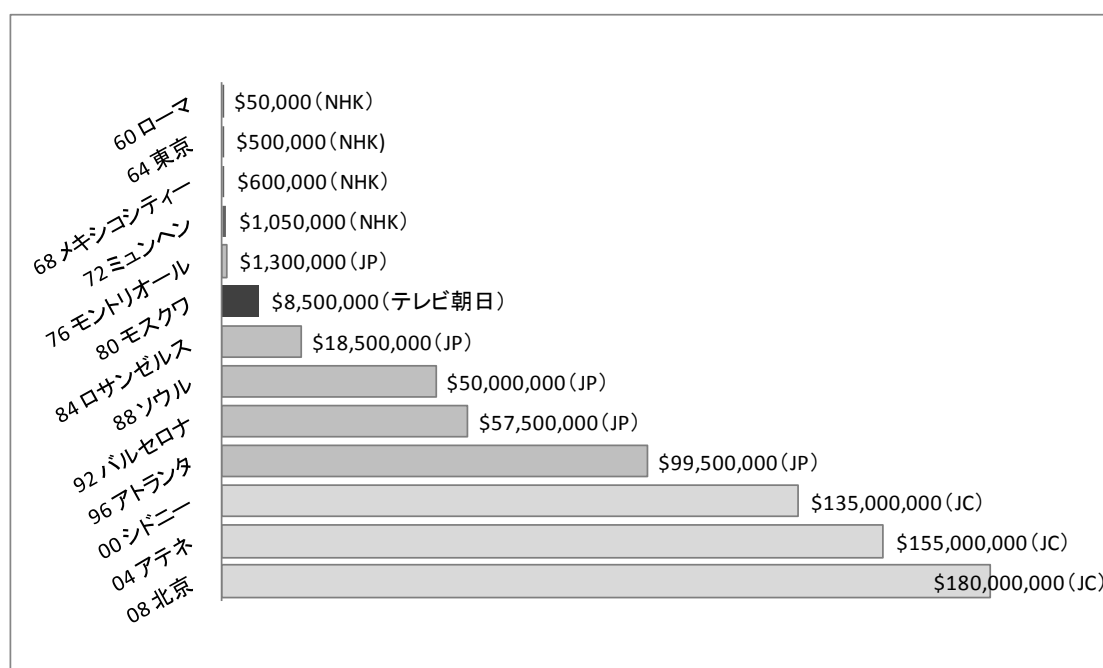


図 4 日本におけるオリンピック大会の放映権料と放映権獲得機関（資料¹¹³より、落合作成）

以下、図 4 は、地上波で放送された全オリンピック競技番組及びハイライト番組のうち、夜間（19:00～22:59 の間に放送が開始された番組）のものの世帯別平均視聴率（以下「視聴率」と略す）の推移を表したものである。放映権料が明らかな増加の一途をたどっているのに対し、この視聴率は 88 年ソウル大会以降、緩やかな減少傾向にあると言える。これが、先に述べた各放送局がさまざまな演出を行って、なんとかして視聴率を稼ごうとする理由である。オリンピックは、高額な放映権料に見合うだけの視聴率をとることはできなくなっているのである。なお、本研究では対象としていない 2012 年ロンドン大会においては、実際に、民放全体の収支が赤字になるという事態が起きてしまった。これは、1984 年以来初めてのことで、日本民間放送連盟会長の井上は「放映権料が高騰した半面、時差による視聴率伸び悩みが予想され、CM 収入が低調だったことが原因」としている。¹¹⁴

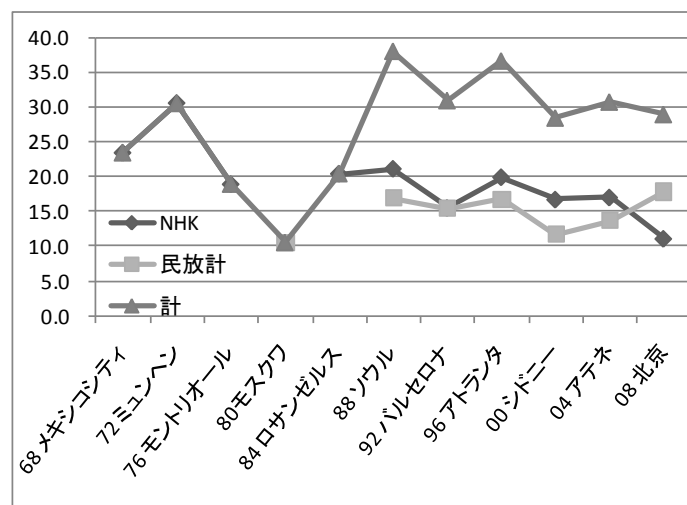


図 5 夜間の番組のオリンピック大会平均世帯視聴率の推移（資料¹¹⁵より、落合作成）

（２）放送時間

①総放送時間

オリンピックの総放送時間は以下のグラフ（図 5）に見るように、微増の傾向にある。ただし、この増加も、先に見た視聴率と同様、放映権料の程の急激な増加は見られない。そのため、放送局はあの手この手の演出を行い、なんとかして放映権料を回収しようとしていると言える。

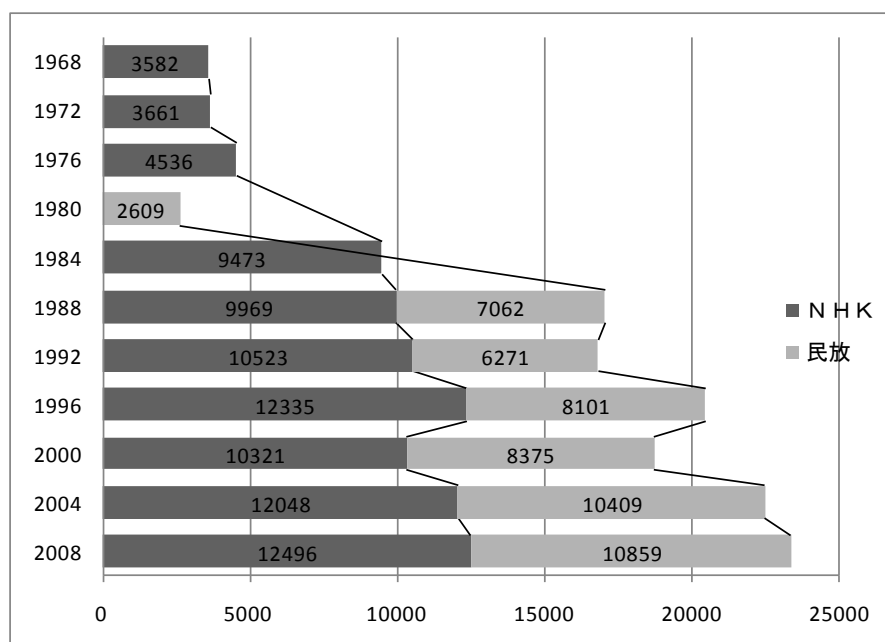


図 6 オリンピック中継の放送時間（単位：分）（資料¹¹⁶より、落合作成）

② 1 番組あたりの長時間化

そうした試みのひとつが、先に見たオリンピックタレントによる応援や感動の物語を伝えるということなのだろう。そうした演出の影響は、1 番組あたりの放送時間にも表れている。

以下は、民放各局のオリンピックに関する番組、『朝日』のテレビ欄から抜き出し、手作業で集計したものを 1 番組の放送時間ごとに① 2 時間未満のもの、② 2 時間以上 4 時間未満のもの、③ 4 時間以上のものに分類したものである。

表 4 テレビの 1 番組あたりに放送時間とそれらが占める割合

	88ソウル		00シドニー		08北京	
①2時間未満	53:44:00	50.8%	42:45:00	35.1%	14:16:00	8.4%
②2時間以上 4時間未満	52:01:00	49.2%	60:46:00	49.9%	81:01:00	47.8%
③4時間以上	0:00:00	0.0%	18:17:00	15.0%	74:13:00	43.8%
計	105:45:00		121:48:00		169:30:00	

(資料より、落合作成)

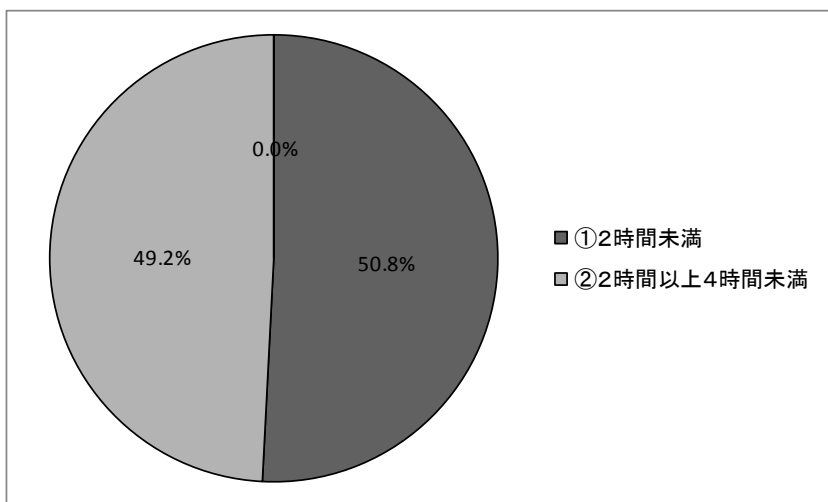


図 7 1 番組あたりの放送時間の割合
(88 年ソウル大会)
(落合作成)

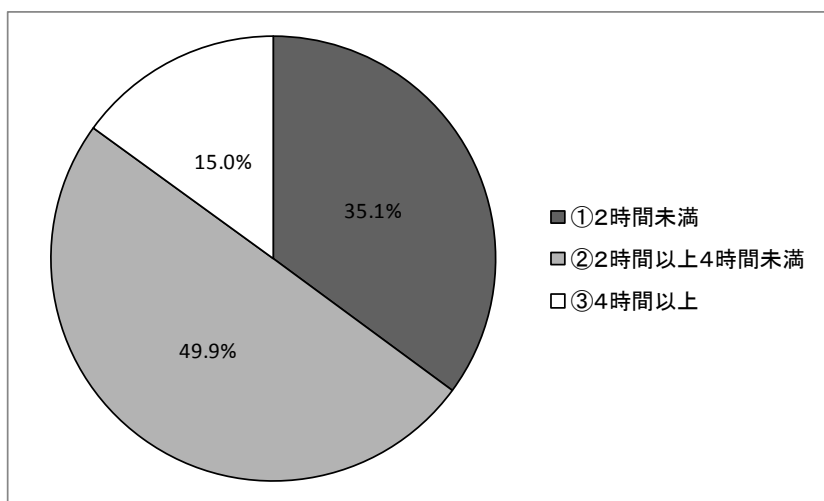


図 8 1 番組あたりの放送時間の割合
(00 年シドニー大会)
(落合作成)

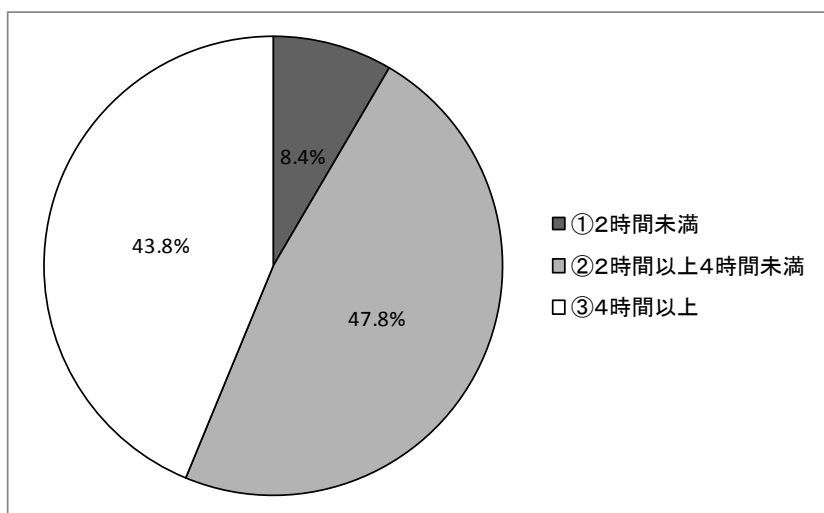


図 9 1 番組あたりの放送時間の割合
(08 年北京大会)
(落合作成)

ここで最も目を引くのは、ソウル大会においては4時間以上の番組は全くないが、北京大会においては全番組の4割以上が4時間を超える番組となっている点である。ソウルの時点では、2時間未満の番組と2時間以上4時間未満の番組が全体のほぼ半数ずつであるのに対して、シドニーになると2時間未満の番組が15%ほど減少し、ちょうどその分、4時間を超える番組が登場するようになる。これが北京になると、2時間未満の番組は1割を切るようになり、全体の9割以上が2時間以上の放送枠となっている。表1で見たとおり、シドニー大会は、総放送時間という点ではソウルと同じであるが、1番組あたりの長時間化という意味では、北京に向けての変化を示していると言えるであろう。

3. その他（雑誌・アサヒグラフ）

新聞、テレビ以外のメディアにも目を向けてみる。写真を主に扱った雑誌である『アサヒグラフ』は、オリンピック大会のたびに、選手や競技を扱った増刊号を出している。以下の表はそれらの表紙を飾った選手の一覧である。

表 5 朝日グラフの表紙

84 ロサンゼルス	カール・ルイス(100m,200m,リレー,走り幅跳び/4冠)
88 ソウル	ジョイナー (100m,200m,リレー/3冠)
92 バルセロナ	岩崎恭子 (200m平泳ぎ/金)
96 アトランタ	有森裕子(マラソン/銅)
00 シドニー	高橋尚子(マラソン/金)

(資料より、落合作成)

84年ロサンゼルス大会、88年ソウル大会において、その表紙を飾ったのは、カール・ルイス、ジョイナーである。カール・ルイスは、100m、200m、リレー、走り幅跳びで優勝し、4冠に輝いた選手であり、ジョイナーはドーピングに関するさまざまな噂や憶測を残し、若くしてこの世を去った選手ではあるが、100m、200m、リレーで優勝し、3冠を取った選手である。

92年バルセロナ大会の岩崎恭子は、競泳200m平泳ぎにおいて、若干14歳ながら、当時の五輪新記録で優勝し、「今まで生きてきた中で、一番幸せです」の言葉とともに、一躍時の人となった。しかし、その後も大きな注目を集めるものの、結果は残せず、この92年バルセロナ大会決勝での記録が生涯の自己ベストとなった。

有森裕子は92年バルセロナ大会で2位という結果を残し、続く96年アトランタ大会において銅メダルという結果を残した。その力走ぶりとレース後の「自分で自分をほめてあげたい」という言葉で、有名になった。

00年シドニー大会の高橋尚子は「Qちゃん」の愛称で親しまれた。シドニー大会後、2001年のベルリンマラソンで当時の世界新を塗り変えて優勝を果たした。

ここまで見てきたように、92年以降は、大会そのものを代表する選手というよりも、大会における日本人の注目を集めた選手と言うことができ、ここまで見てきた世界一よりも日本代表をという傾向のここに見ることができると考える。

-
- ¹ メディア総合研究所編、『メディア総研ブックレット 11 新スポーツ放映権ビジネス最前線』、花伝社、2003 年、1-8 頁。1984 年ロサンゼルス大会は、「近代オリンピック史に刻まれるエポックメイキングな大会であった」と、言われている。大会組織委員長のピーター・ユベロス（旅行代理店経営の実業家）は、「商業主義に徹し、財政確保を図った」。スポンサーシップ（1 業種 1 種）やマーチャンダイジング・ライセンス（大会エンブレム、マスコットなどの商品化）などのシステムが導入された。それと共に、従来の「公益性を前提にした」I O C の考え方を覆し、「放映権を情報商品として、その市場価値を追求した」。1980 年に I O C 会長となったアントニオ・サマランチは、このユベロスの用いた手法を、大会組織委員会ではなく、I O C に資金が入るものに作り替え、「オリンピックを巨大化させるとともに、商業主義を徹底させた」。
- ² 読売新聞公式ホームページ、数字で見る読売新聞、<http://info.yomiuri.co.jp/company/data.html>、2013 年 1 月 10 日閲覧。
「朝日新聞 MEDIA DATA 2013」（PDF ファイル）、朝日新聞社広告局公式ホームページ、http://adv.asahi.com/modules/media_kit/index.php/2013.html、2013 年 1 月 10 日閲覧。
- ³ 『読売』（朝刊）、1984 年 7 月 29 日、1 面。
- ⁴ 『読売』（夕刊）、1984 年 7 月 31 日、1 面。
- ⁵ 『読売』（朝刊）、1984 年 8 月 7 日、1 面。
- ⁶ 『朝日新聞』（夕刊）、1984 年 8 月 8 日、1 面。
- ⁷ 『読売』（夕刊）、1984 年 8 月 8 日、1 面。
- ⁸ 『朝日』、『読売』（朝刊）、1984 年 8 月 9 日 1 面。
- ⁹ 『朝日』（朝刊）、1988 年 9 月 30 日、1 面。
- ¹⁰ 『朝日』、『読売』（夕刊）、1988 年 9 月 27 日、1 面。
- ¹¹ それ以前の 1912 年のストックホルム大会や 36 年ベルリン大会、56 年メルボルン大会、64 年東京大会においても、公開競技として採用されている。
- ¹² 『読売』（朝刊）、1984 年 8 月 9 日、1 面。
- ¹³ 『朝日』（朝刊）、1988 年 9 月 29 日、1 面。
- ¹⁴ 『読売』（朝刊）、1988 年 9 月 29 日、1 面。
- ¹⁵ 『読売』（朝刊）、1992 年 7 月 26 日、1 面。
- ¹⁶ 『朝日』『読売』（朝刊）、1992 年 7 月 30 日、1 面。
- ¹⁷ 『読売』（夕刊）、1992 年 8 月 5 日、1 面。
- ¹⁸ 『読売』（夕刊）、1996 年 7 月 27 日、1 面。
- ¹⁹ 『朝日』（朝刊）、1996 年 7 月 22 日、1 面。
- ²⁰ 『朝日』（夕刊）、1996 年 7 月 27 日、1 面。
- ²¹ 日本オリンピックアカデミー編『ポケット版 オリンピック事典』、161 頁。
- ²² 『読売』（夕刊）、1996 年 7 月 23 日、1 面。
- ²³ 『朝日』（夕刊）1992 年 8 月 6 日、1 面。
- ²⁴ 『読売』（夕刊）1992 年 8 月 6 日、1 面。
- ²⁵ 『朝日』（夕刊）1992 年 8 月 5 日、1 面。
- ²⁶ 『朝日』（夕刊）、1996 年 8 月 2 日、1 面。
- ²⁷ 『読売』（夕刊）、1996 年 8 月 2 日、1 面。
- ²⁸ 『読売』（朝刊）、1996 年 8 月 3 日、1 面。
- ²⁹ 『読売』（夕刊）、1996 年 8 月 3 日、1 面。
- ³⁰ 『朝日』（夕刊）、1992 年 8 月 3 日、1 面。
- ³¹ 『読売』（夕刊）、1992 年 8 月 3 日、1 面。
- ³² 『朝日』（夕刊）、1992 年 8 月 3 日 1 面。
- ³³ 『朝日』、『読売』（夕刊）、1996 年 7 月 27 日、1 面。
- ³⁴ 『朝日』（夕刊）、1996 年 7 月 27 日、1 面。
- ³⁵ 『読売』（夕刊）、1996 年 7 月 27 日、1 面。
- ³⁶ 『朝日』（朝刊）、1996 年 8 月 3 日、1 面。
- ³⁷ 『読売』（朝刊）、1996 年 8 月 3 日、1 面。
- ³⁸ 『朝日』（朝刊）、1996 年 7 月 29 日、1 面。

-
- 77 『朝日』(朝刊)、2004年8月15日、1面。
- 78 『朝日』(朝刊)、2008年8月10日、1面。
- 79 『読売』(朝刊)、2008年8月10日、1面。
- 80 『朝日』(朝刊)、2004年8月16日、1面。
- 81 『読売』(朝刊)、2004年8月16日、1面。
- 82 『朝日』(夕刊)、2004年8月16日、1面。
- 83 『読売』(夕刊)、2004年8月16日、1面。
- 84 『朝日』(朝刊)、2004年8月19日、1面。
- 85 『朝日』(夕刊)、2004年8月19日、1面。
- 86 『読売』(朝刊)、2004年8月19日、1面。
- 87 『読売』(夕刊)、2004年8月19日、1面。
- 88 『朝日』(夕刊)、2008年8月11日、1面。
- 89 『読売』(夕刊)、2000年8月11日、1面。
- 90 『朝日』(夕刊)、2008年8月14日、1面。
- 91 『読売』(夕刊)、2008年8月13日、1面。
- 92 『朝日』(夕刊)、2008年8月14日、1面。
- 93 『読売』(夕刊)、2008年8月14日、1面。
- 94 『朝日』(朝刊)、2008年8月15日、1面。
- 95 『読売』(朝刊)、2008年8月15日、1面。
- 96 ドーピング問題など、競技の結果に関するものは対象外とした。
- 97 ここでは、開会式を知らせる記事が出てから、閉会式を知らせる記事が出るまでを大会期間とした。
- 98 IOC 公式ホームページ、大会別日本代表選手入賞者一覧、
<http://www.joc.or.jp/games/olympic/winnerslist.html>、2013年1月10日閲覧。
- 99 『読売』(夕刊)、1992年8月8日、1面。
- 100 『朝日』(夕刊)、2008年8月18日、1面。
- 101 『ザテレビジョン』、角川マガジズ、第7巻39号、1988年9月30日、75頁。
『同上雑誌』、第11巻30号、1992年7月31日、82頁。
『同上雑誌』、第15巻29号、1996年7月19日40-41頁。
- 102 以下に、各局公式ウェブサイトをあげる。
日本テレビホームページ、北京五輪放送スケジュール <http://www.ntv.co.jp/beijing2008/>、
2013年1月7日閲覧。
テレビ朝日ホームページ、北京オリンピック 2008、<http://www.tv-asahi.co.jp/beijing2008/>、
2013年1月7日閲覧。
テレビ東京ホームページ、北京オリンピック 2008、<http://www.tv-tokyo.co.jp/olympic2008/caster.html>、
2013年1月7日閲覧、フジテレビホームページ、北京オリンピック、
<http://www.fujitv.co.jp/sports/beijing2008/commentator.html>、2013年1月7日閲覧。
- 103 『前掲雑誌』、第17巻9号、2004年9月1日、16頁。
- 104 日本民間放送連盟編、『日本民間放送年間 97』、コーケン出版、1997年、45頁。
- 105 『前掲雑誌』、第7巻39号、1988年9月30日、60-61頁。
- 106 『同上雑誌』、同号、60頁。
- 107 『朝日』(夕刊)、年8月25日、1面。
- 108 『前掲雑誌』、第7巻39号、1988年9月30日、75頁。
- 109 メディア総合研究所編、『メディア総研ブックレット 11 新スポーツ放映権ビジネス最前線』、花伝社、
2003年、11頁。
- 110 テレビ朝日公式ホームページ、社史、<http://company.tv-asahi.co.jp/contents/corp/syashi.html>、
2013年1月10日閲覧。テレビ朝日は正式な社名を全国朝日放送(株)と言い、その前身は(株)日
本教育テレビ(NET)である。なお、社名の変更は、1977年4月に行われたので、NETがIOCと
の交渉にあたった。
- 111 『同上書』、323頁。
- 112 『ザテレビジョン』(首都圏版)、第15巻29号、1996年7月19日。フジテレビのスポーツ局のプロ
デューサーは「競技の中継自体は、各局とも同じ映像になるので、キャスターやレポーターで差別化

するしかない。フジはスポーツの OB よりも新鮮味のある視聴者に近い素直な目線で語れるキャラクターを重視しました」と述べている。

113 橋本、『前掲書』、8 頁。

114 『読売』（朝刊）、2012 年 9 月 21 日、31 面。

115 ビデオリサーチ社ホームページ、

http://www.videor.co.jp/data/ratedata/program/oly_sum/sumolya.htm、2013 年 1 月 9 日閲覧。

116 同上ホームページ、2013 年 1 月 9 日閲覧。

第Ⅲ章 「応援」の対象としての日本代表

1. 日本代表を応援するという態度

第Ⅱ章において、阿部や香山の指摘したような日本代表を応援するという態度を助長するようなメディアのありかたを、本研究においても、見ることができた。

新聞では、3つの特徴を見ることができた。1つは、「世界一よりも日本代表」という紙面に登場する日本代表選手の増加の傾向である。この変化は数量的にも明らかとなった。内容に目を向けると、たとえば、84年ロサンゼルス大会、バレーボール女子、日本代表は準決勝で敗れ、3位という結果に終わった。この大会で優勝したのは中国であった。84年ロサンゼルス大会バレーボール女子の優勝という、バレーボール世界一の結果は、『朝日』及び『読売』において、1面写真入りで伝えられた。このときに使用された写真は、歓喜する中国チームのものと中国と日本が写った表彰式のものであった。それが、88年ソウル大会、日本代表が3位決定戦で敗れた際には、試合終了の瞬間、うなだれる日本チームのものとなった。

2つ目は、「オリンピックという歴史の中の日本」という点である。これは、同じ競技である場合はもちろん、まったく別の競技の場合であっても、日本代表という枠組みの中であたかも一続きの歴史であるかのように「日本がメダルを獲得するのは〇年ぶり」などと、語られるということである。これによって、私たちは応援してしかるべき対象としての日本代表という考えを、刷り込まれるのではないだろうか。なお、このオリンピックという歴史の中の日本については84年ロサンゼルス大会時からみられるものであった。

3つ目は、「選手個人の歴史」が記述されるようになった点である。もともと、新聞1面に載るオリンピック関連記事は、競技の簡単な記録を載せたものがほとんどで、まさに報道と呼べるようなものであった。しかし、選手の話を経て、署名記事が登場するようになると、その様相は大きく変化する。記者がノンフィクション作家さながらの巧みな文章力を発揮し、選手はその生い立ちから、競技での挫折、そして監督との関係に至るまでさまざまな物語を描くようになるのである。なお、ここで語られる物語というのはだれもが理解し、共感し得るものであるとすることができる。これによって、私たちは選手をより自己に近い存在として認識できるようになると考えられる。

テレビにおいては、今福らによって指摘された「応援」という演出が、もはや当たり前のものとして定着したようである。この応援を行うのが「オリンピックタレント」である。彼、彼女らは、たとえ元アスリートや現役の選手であっても、決して「アスリートの目線」で視聴者に何かを伝えることを試みようとはしない。あくまで視聴者と同じ「素人の目線」で、競技をともに「応援する」存在であることを、望まれ、自身もそうあろうとする。この「応援」というのは主観的な行為であると言っているが、テレビという公共の電波にのるものとして客観性を保とうという態度は、オリンピックタレントには求められていないのである。また、応援に他に、オリンピックタレントが伝えるべき内容

として「感動」があげられる。これは、競技の超越性によるものではなく、サイドストーリーを主にした、競技に対してのリテラシーが低い者でも、容易に共感できるものである。この点において、これらは新聞の特徴で見た「個人の歴史」と同様のものとも言うことができるだろう。

ここまで、7つのオリンピック大会の新聞、テレビにおける日本代表の伝えられ方の特徴を見てきた。そこには、阿部や香山の指摘した日本代表を応援するという態度の形成につながると考えられる特徴を見ることができ、阿部や香山の指摘は、正しいということが証明された。そこで今度は、今回明らかとなった特徴をもとに、日本代表を応援するという視点から、ステージわけを試みる。なお、これまで見てきたようにオリンピックのメディアでの扱われ方は、徐々に変化し、人びとに受け入れられてきたものである。そのため、このようなステージわけを行うことは難しい。しかし、本研究は阿部や香山が点で指摘したオリンピックを応援するという態度を線で眺めることを目的としたものであるため、そのステージわけにあえて挑戦したい。

この日本代表を応援するということにもっとも多大な貢献をしたものは、テレビであるだろう。そのため、7つの大会における1つ目の分岐点は、オリンピックタレントを各局がこぞって起用するようになった92年バルセロナ大会と考える。この大会は、新聞においては、記録以外の情報が紙面に多く取り入れられ絵的な描写がなされた大会であった。また、選手の愛称を紙面に登場させるなど、選手をより身近な存在として描こうという試みが見られた大会であったとすることができるだろう。他にも、この大会では、オリンピックにおける日本代表という枠組みにおいて、競技を超えた語りがされていた。『アサヒグラフ』の増刊号の表紙を見てみても、84年ロサンゼルス大会のカール・ルイス、88年ソウル大会のジョイナーからの92年バルセロナ大会の岩崎恭子と、この変化は大きなものである。ここにも、「世界一よりも日本代表を」という特徴が見られる。

2つ目の分岐点は、オリンピックタレントが元選手からお笑い芸人やタレントに大きくシフトする00年シドニー大会であるだろう。『読売』は00年シドニー大会から、毎刊1面に署名記事を掲載するようになるし、04年アテネ大会から、『朝日』は毎刊1面に署名記事を掲載するようになる。これらのことから00年シドニー大会を2つ目の分岐点とすることは妥当であると言えるだろう。

よって、それらの浸透のステージは、①84年ロサンゼルス大会・88年ソウル大会、②92年バルセロナ大会・88年ソウル大会、③00年シドニー大会・04年アテネ大会・08年北京大会、となり、新聞の項で見た80・90・00年代でわけたものと同様であった。

2. 新しいナショナリズム

ここでは、そうした日本代表を応援するという態度が、現代特有のものであるのかということを、改めて検討する。なお、先行研究としてあげた阿部は、こうした態度を今まで

のいわゆるナショナリズムとは異なる「ナショナルなもの」としている。香山は、大戦時のナショナリズムとの線引きは難しいとしている。

坂上によると、1928年以降、「文部省を中心に展開されたスポーツ政策は、第一に、スポーツによる健康な肉体作りによって、第二に、スポーツ精神の涵養によって、そして第三に、スポーツを不平や鬱憤から逃避させ忘却させる『安全弁』として利用することによって、国民の『思想善導』を実現していこうとするものであった」。このスポーツ政策は、多くの矛盾を孕み、当然のことながら明らかな限界もあったが、「スポーツを『安全弁』として利用し、不平や鬱憤を忘却させるという第三の戦略からみれば、十分な効果をあげ」た。¹たとえば、1932年のオリンピックロサンゼルス大会における「日本人の活躍は、マスメディアを介して国民的な熱狂を生み出し」た²。ここで言うマスメディアとは、主に新聞及びラジオのことであり、当然のことながら、テレビは含まれない。

その際、強大な力を発揮したのがマスメディア、とくにラジオと新聞であった。

ロス五輪の報道は、時差の関係で号外と夕刊が主力となった。なかでも、『東京朝日新聞』と『東京日日新聞』は、大会期間中にどちらも一ページ大の号外を四度、小型の号外を十五回出し、五輪報道をきそいあった。(略)

また、両社は五輪の現地写真の掲載をきそって、汽船でアメリカの西海岸から運ばれてきたオリンピックの写真を、金華山沖や房州千倉沖で待ち受けて、飛行機で東京まで運ぶという「写真の空輸戦」を展開した。(略) 八月十三日には、開会式の模様を収めた映画フィルムも到着し、朝日新聞社は即日『朝日フォックス発声ニュース』のタイトルをつけ、ニュース映画として各地で上映していった。

3

ここで指摘されるメディアを介して伝えられた1932年ロサンゼルス大会の国民的熱狂と、現在の日本代表を応援するという態度、両者の大きな違いは、政府による思惑があったか否かという点であるだろう。政府は「安全弁」としてスポーツを利用し、それに気がついた知識人、左翼は、それぞれスポーツを「無花果の葉」、「アヘン」と呼んだ⁴。そのことを指し、阿部も現在のスポーツにおいて、日本代表を応援するという態度と戦前のそれと別なものとして、指摘したのである。この指摘はある意味で的を射ており、現在を生きる私たちにとって容易に納得できるものである。加えて、第二次世界大戦へと突き進んだ全体主義的思想を持つ政府の思惑によって操作された当時の日本国民と、自分たちが同じなどとは考えたくもないことである。しかし、以下の1936年ベルリン大会に関する記述にあるように、そうした思惑というのは、決して表に現れないからこそ、大きな力を発揮するのであり、そのことを論拠として現在の日本代表を応援するという態度と戦前のそれらが別なものだと言うことは、できないだろう。現在では、「ナチのプロパガンダとして利用された大会」として悪名高い36年ベルリン大会も、当時の人びとはファシズムを称賛する気など、さらさらなく、現在の私たち同様、日常とはまったく異なるオリンピックという空間に酔いしれていたとすることができるのではないだろうか。

(前略) ヒットラーと当時のドイツの雰囲気もそう緊張したものではなかったようだ。

ヒットラーはオーエンスト握手せずに引き揚げたと伝わるが、オーエンス自身は「彼は私が手を振ると手を振ってくれた」と語り、町では子供たちや市民から握手やサイン攻めにあつた。むしろ、合衆国大統領のフランクリン・ルーズベルトからは祝電も届かず、ホワイトハウスに招かれることもなく、祖国の陸連からは何一つ栄誉を与えられず、〈黒人専用〉のレストランで食事をしなければならなかった。アスリートとしてのオーエンスにとって、ベルリンは最高の舞台であり、80年に肺癌で他界したとき、ベルリン市民はかつてのヒーローを偲んでオーエンス通りを命名している。

ベルリン・オリンピックはナチスの大会、ファシストの祭典と言われるが、文献をあさっても、その後の冷たい軍国主義の空気は伝わってこない。80年代後半からの日本を誰も〈バブル〉だなどといわなかったように、時代はすりと変わるのだ。⁵

メディアを通して描かれるスポーツを見る、メディアに描かれる日本人を応援し、その結果に一喜一憂するという点で、両者は同質なものと言することができるのである。

3. 現在の日本代表を応援するという態度に関する考察

そうした歴史的な認識をふまえつつも、本研究では、現在の日本代表を応援するという態度と戦前のそれとの差異についても考えておきたい。両者において大きく異なる点は、圧倒的な情報量の差である。

先の1932年ロサンゼルス大会、及び第I章で述べたように、海の向こうで行われるオリンピックを伝えるということは、メディアにとって多大な労力を必要とするものであり、そうした労力をかけたとしても、伝えられる情報の量は限られていた。また、その少ない情報を必死に伝えようとしたメディアであるが、南部の発言に見るように、選手の生の声を伝えるというような役割を果たすことはできていなかった。それでも、先に見たように、多くの国民は熱狂したのである。ここに、現在の日本代表を応援するという態度との大きな違いがあると考えられる。つまり、限られた情報、それも選手の生の声といった選手個人をメディアから感じることなく、戦前の人びとは日本代表を応援し、その結果に一喜一憂することができたのである。そのため、日本人であるという意識や日本代表を応援するという態度が、オリンピックやスポーツの場面以外で形成されていたのではないだろうか。

一方、現在に見られる日本代表を応援するという態度は、メディアがより多くの人を惹きつけるためのある種の演出を行い、それによって形成されたものであると言えるのではないだろうか。先ほどから、何度も登場しているオリンピックタレントはその最たる例である。メディアは、オリンピックという世界の舞台で活躍する日本代表をただ見せるのではなく、多くの人を惹きつけることができないと考えているのだろう。たとえば、オリンピック、そしてそこで活躍する選手がそれだけで、人びとを惹きつけるとメディアが考えたのなら、わざわざ高額な出演料を払って、タレントを雇うことはしないはずである。また、新聞の署名記事に見る個人の歴史やオリンピックタレントが伝えたがる競技の裏側といった

物語が、メディアを通して伝えられるのも、そうしたメディアの考えに起因するのではないだろうか。

そのため、もともとあった日本代表を応援するという態度をメディアが煽ったのが戦前で、日本代表を応援するという態度がメディアによって形成されたのが現在と言うことができるかもしれない。しかし、ここで注意しなければならないのは、よく知っているタレントが、「一緒に応援しよう」という、言うなれば単純で簡単な呼びかけによって、日本代表を熱狂的に応援するという態度が形成されている点である。選手に関する物語についても同様である。競技については素人であるオリンピックタレントが伝えることのできる程度の感動の物語で、喚起される日本代表を応援するという態度が生まれる土壌には、現在の私たちに無意識に潜むナショナルなものへの羨望があるのかもしれない。

¹ 坂上康博、『権力装置としてのスポーツ 帝国日本の国家戦略』、講談社選書メチエ、1998年、195-196頁

² 『同上書』、185頁

³ 『同上書』、181頁

⁴ 『同上書』、195頁

⁵ 武田、『前掲書』、134-135頁

終わりに

本研究では最初に目的とした現在の日本において見られるスポーツの国際大会において日本代表を応援するという態度を、メディアによるオリンピックの伝えられ方を見ることで、改めて確認することができた。その上で、その日本代表を応援するという態度の浸透を3つのステージにわけて説明した。

また、そうした現在の日本代表を応援するという態度を戦前のそれと比較し、違いを指摘した。ここでは、現在と戦前のメディア技術の差による情報量の差から、日本代表を応援するという意識がもともとあったものなのか、メディアによって作られたものなのかという一応の差異を見出すことができた。しかし、現在の日本代表を応援するという態度がメディアの演出によって形成されたものだとしても、それを簡単に受け入れることのできる土壌があることは否定できない。本研究で分類したステージ1において、冷静で客観的なオリンピックの描かれ方をしていたのは、国家的全体主義に走り、痛ましい戦争をした記憶によるものとも言えるのではないだろうか。そうした危惧、日本代表を手放しに応援することへの抵抗が薄れていったのがステージ2、ステージ3であるということもできるかもしれない。

なお、本研究では、サイドストーリーを語ることやタレントによる応援というメディアの演出に対して、批判的に論じてきた。しかし、そうした演出が広く利用され、それによって多くの人のオリンピックにふれるきっかけとなっていることも忘れてはならない。また、日本代表を応援することの背景に、政治や経済と行った社会的要因に加えて、本研究では、言及することのできなかつたサッカー日本代表の存在についても視野に入れる必要があるだろう。1993年のJリーグの開幕で注目を集めたサッカーは、1998年のFIFAワールドカップ本大会への日本代表の出場によって、一躍国民的スポーツとなり代表を応援する機運は一気に高まった。このワールドカップが本研究においてステージ3の始まりと位置付けた00年アテネ大会の2年前であることから、その影響を大きく受けていると考えられる。

本研究は、今まで点でとらえられてきたオリンピックのメディアでの扱われ方を、線でとらえてその変化を見たものであり、一定の成果をあげることができたと言える。しかし、根拠とする資料がまだまだ不十分であり、今回明らかになった傾向やステージわけを理論として確固としたものにするためには、さらなる研究がのぞまれる。